佛教大学社会連携センター年報

第　9　号

2023 年 6 月

佛教大学社会連携センター

目 次

所属・役職は 2022 年度当時のものです

1. 巻 頭 言 …… 作田誠一郎 … 2
産学連携の諸相 …… 大藪　俊志 … 4

2. 特 集
佛教大学ウクライナ人道支援企画 …… 海老原星太 … 6

3. 連携事業の取組み
① 2022 年度二条駅地域安全ネットワーク活動報告…… 山本　奈生 …10
②モデルフォレスト運動 …… 海老原星太 …11
③浄土宗との連携事業 …… 山下　仁男 …14
④京都市くらし安全推進課・京都府北警察署との防犯啓発物作成（映画部・漫画研究会） 海老原星太 …16
⑤京都市立北総合支援学校との連携事業 …… 山下　仁男 …19

4. Topics
①ホテルと地域社会の繋がり構築、魅力発信を佛大生が提案！ …… 宮本　泰子 …21
②学生がアプリ開発に協力！ …… 海老原星太 …22
③ぶつだいちびっこひろば活動報告について …… 白井はる奈 …23

5. 社会連携センタープロジェクト
①防犯啓発・立ち直り支援プロジェクト …… 作田誠一郎 …25
②鷹峯地域活性化プロジェクト …… 山下　仁男 …28
③佛教大学 FAST 活動報告…… 山本　奈生 …31
④大学発進（信）プロジェクト …… 谷本　和也 …33
⑤「知ってる？パラスポーツの魅力～ Do You Know the Power of Parasports？～」活動報告について … 白井はる奈 …35
⑥ SDGs 推進プロジェクト …… 宮本　泰子 …37

6. 地域福祉フィールドワーク事業
①「見守りホットライン」活動報告 …… 加美　嘉史 …38
②防災と福祉「学びあい」…… 後藤　至功 …42

7. 学生ボランティア室 …… 宮本　泰子 …45

8. 社会連携センター活動記録
①北区連携事業 ……51
②中京区連携事業 ……53
③北野商店街（京都市上京区）連携事業 ……54
④南丹市との連携事業 ……54
⑤社会連携センタープロジェクト ……55
⑥地域福祉フィールドワーク事業 ……58
⑦学生企画まちづくりプロジェクト ……59
⑧学生ボランティア室 ……60
⑨佛教大学ボランティア支援金制度 ……64
⑩受託事業・受託研究 ……64
⑪その他の活動 ……64
⑫活動中止・延期措置等の記録 ……65
⑬ホームページ掲載記録 ……65

9. 資料　社会連携センター組織、規程 ……67

10. 編集後記 …… 内田　　仁 …71

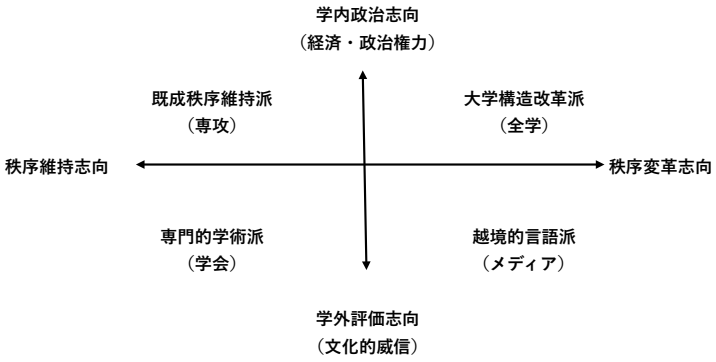
1. 巻頭言

研究推進機構長　　作田　誠一郎

大学を取り巻く状況が一変しつつある。少子化の影響もあり、定員を充足しない大学および短期大学の存続が危ぶまれている状況は周知のとおりである。文部科学省は、複数の大学における連携推進法人の設立等の検討や 2016 年度入試からはじまった私立大学入試の定員管理の厳格化による経常費補助金の配分基準を厳しくした(2023 年度入試から緩和)。このような私立大学の経営環境の変化が、その運営を圧迫しつつある。一方では、大学改革の推進が求められ、大学の在り方について議論が重ねられている。

このような大学改革に対して、佐藤郁哉（2019）は、①「開化先生」的メンタリティ、②改革の自己目的化、③集団無責任体制、④ドラマ仕立ての改革論議、⑤リサーチ・リテラシーの欠如をあげて批判的な検討を行なっている。そのあとがきには、「大学と大学教育が抱えている問題に関して、大学関係者が自分の頭で考え抜いた上で結論を出していくことに他なりません。そして、その結論については借り物ではない自分たち自身の言葉で表現していかなければなりません」（佐藤 2019：416）と述べている。詳細は本書を読んでいただきたいが、今後の大学は、文部科学省等の上からの大学改革のみでは厳しい状況に追いやられることが読後感として理解できた。そして、もう一冊、今後の大学を考える上で示唆に富んだ本について触れておきたい。こちらは、吉見俊哉の著書である。吉見（2021）は、コロナ禍における大学の窮状について、人口構造的な要因だけではなく、グローバル化やオンライン化への対応の遅れを指摘し、「垂直から水平へ、単線から複線へ、通過儀礼からグローバルな知的移動のハブへと日本の大学を転換させていく、その第一歩を踏み出さなければならいない」（同書：36）と指摘している。吉見の分析は、歴史社会学の視点から大局的に大学を捉える点で多くのアイディアを与えてくれる。

右の図は、吉見が社会学者であるＰ・ブルデューが示した「経済・政治権力の軸」と「文化的威信の軸」をそれぞれ大学教員の志向性（理念型としての「学内政治志向」と「学外評価志向」）の次元に捉えなおした大学教授の４類型である。



大学教授の４類型
（吉見 2021 より作成）

吉見によれば、「学内政治志向」の先にあるのが大学行政資本であり、学外評価志向の先にあるのが学問的権威資本であるという。「既成秩序維持派」と「専門的学術派」は、大学全体の未来や人類の知の未来にはそれほど関心がないという。そして「大学構造改革派」と「越境的言論派」は、反対に大学全体や人類の知の未来に関心があり、自らの立場や地位が自らの実力で獲得したものと考える。総じて言えば、大学はばらばらの個人意志を有した専門家の集まりであり、優れた行政官や政治家の集団ではないという。紙幅の関係で、詳細な説明は割愛せざるを得ないが、本書ではそれぞれの派の特性によって大学改革の困難性が指摘されており、大学改革に関する議論が、企業や自治体とは異なる根本的な違いを理解しなければならないと言及している。そして、本書では、多角的にみても大学の構造改革の根本的な限界が提示されている。しかし、吉見は、「ここまでの議論を進めてくると、学長も、大学教員も、それぞれだけでは大学改革の最終的な主体

たり得ないことが明らかになってくる。だからと言ってここで国家や産業界が介入してきたのでは元も子もない。こうなると誰も、単独で日本の大学の窮状を救える人はいないことになりそうだが、最後に残されているもう一群の人々がいる。それは広義の大学職員である」（同書：260）と述べている。つまり大学職員は、ルーティン的な業務の遂行を AI と IT ベースのシステムに置き換えて時間の確保をした上で、「それぞれの専門的な組織分野において、教員の意思からは独立して意思決定し、責任も負わなければならない。彼らもそれぞれの分野で専門職となっていかなければならないのだ（中略）そして、それらを調整していくことのできる最終的審級として、やはり学長のリーダーシップや構造改革派の努力も存在するのである。何よりも、そのような諸々の改革努力の向かう先は、教員と学生双方における自由で創造的な時間の確保でなければならない」（同書：262）として、大学の時間について再考することを提案している。つまり、これらの時間を用いて「知的創造」という資源を生み出すことが重要であると指摘している。

この吉見の指摘は、公立や私立、そして大学の規模の点においてすべての大学運営を網羅するものではない。しかし、多くの大学でコロナ禍という非対面の状況下にありつつも、従来の大学運営や授業方法に対する改善点の検討や再帰的な活動（A· ギデンズが示唆した過去の活動等を反省的に捉えなおして自身の行為に反映させること）が試みられた。見方を変えれば、これまでとは異なる大きな社会的な変化に対して、大学を客観的にまた大局的に捉えなおす契機になったと言える。

社会連携センターは、産官学という枠組みをも超え、地域社会と大学、大学と大学など、さまざまな連携が模索できるセクションである。その関係性は、アイディアや積極的な活動を通じて広がりをみせていく。そして、関係性の広がりが、学生や教職員にも「知的創造」という資源を創出する契機につながっていくと思われる。そのためには、創造的な時間の確保にも留意しつつ、教職員の闊達な連携と自律的なアイディアの創出および実行が今後の活動の要になるのではないだろうか。

ここで、2022 年度の社会連携センターの活動についてふれておきたい。新型コロナウイルス感染症対策として「社会連携課·社会連携センター関係事業の活動ガイドライン」のもとで活動を実施してきた。現在は、6 つの社会連携センタープロジェクトが実施されており、学生企画まちづくりプロジェクトなど地域社会との連携も図られている。また「佛教大学ウクライナ人道支援企画」では、募金をはじめフリーマーケットや学食とのコラボレーションにより支援金を赤十字に寄付することができた。まだ制約がある状況において、『佛教大学社会連携センター年報第 9 号』が刊行できたことは、学生や教職員を含め関係者各位の尽力にほかならない。一方、政府からは新型コロナの制限の緩和に向けて新たな方針が示された。今後の社会連携センターの新たな活動に期待したい。

〈引用・参考文献〉

Giddens, Anthony, The Consequences of Modernity,Polity Press.（松尾精文・小幡正敏訳，1993,『近代とはいかなる時代か？――モダニティの帰結』而立書房）
佐藤郁哉，2019,『大学改革の迷走』筑摩書房
吉見俊哉，2021,『大学は何処へ――未来への設計』岩波書店
Bourdieu, Pierre,1984,Homo Academicus, Paris: Éditions de Minuit.（石崎晴己・東松秀雄訳，1997,『ホモ・アカデミクス』藤原書店）

産学連携の諸相

社会連携センター長　**大藪　俊志**

広義の社会連携・地域連携活動の形態に含まれる産学連携（産学官連携）の活動状況をみると、最近の調査によれば、大学などの高等教育機関による民間企業との共同研究の件数は 29,644 件、研究資金等の受入額は約 4,112 億円、民間企業からの研究資金等受入額は約 1,278 億円となっている（文部科学省 2023）。

高等教育機関が関わる産学連携の活動には、①企業と大学等との共同研究、受託研究など研究面での活動、②企業におけるインターンシップの実施、教育プログラムの共同開発など教育面の連携、③ TLO（Technology Licensing Organization：技術移転機関）の活動など大学等の研究成果に関する技術移転活動、④兼業制度に基づく技術指導など研究者によるコンサルタント活動、⑤大学等の研究成果や人的資源等に基づいた起業など多種多様な形態が存在する（文部科学省 2003）。

これまで産学連携の多くは理学・工学・医学・薬学などの分野において実施されてきたが、近年では、取組みの遅れていた人文･社会科学系の学問分野においても産学連携の活動が活発化しつつある。これに関し、いわゆる文系の学部を擁する全国の国公私立大学を対象とした調査では、「まちづくり」「地場産業振興」「商店街活性化」「企業連携」「観光振興」などをテーマとする事業分野において産学連携活動が実施されており、連携先としては自治体行政、商工会議所、NPO などが多い（吉田 2014）。また、大学側の産学連携の目的としては、「地域貢献･地域振興」「研究成果の教育･社会への還元」「参加学生の成長」「知名度･認知度の向上」「社会的責任」などが挙げられており、事業分野における連携の手段としては、「地域資源発掘･地域ブランド」「コミュニティ再生」「新商品・新サービス開発」「PR・情報発信の改善」「ネットワークの構築」「顧客満足度向上」「新規販路の開拓・技術相談」「業務の効率化」「流通システムの改善」「ビジネスコンテスト」などが取り組まれている（吉田 2014）。

人文･社会科学系の分野における産学連携の取組みは広範多岐にわたるが、その取組み事例を分析すると、以下の表のとおり研究系、教育系、事業系、社会貢献系の 4 タイプに類型化することも可能とされる（人文社会科学系産官学連携を検討する会 2008）。

表　人文・社会科学系における産学連携の 4 類型

	研究系産官学連携	教育系産官学連携	事業系産官学連携	社会貢献系産官学連携
目的	教育の研究分野をさらに発展させるために行う連携	学生の教育効果をさらに高めることを目的とした連携	大学の資源を活用し、ビジネスへ応用するなど、収益性のある連携	大学の資源を活用し、地域活性化等に応用させる連携
主体	教員	学生（教員はフォロー役）	教員（個人） 大学事務局	教員 大学事務局
資金	主に依頼者負担	場合による	主に依頼者負担	主に大学負担
取組（例）	①地域産業調査 ②マーケティング調査（アンケート票作成分析）	①インターンシップ ②プロジェクト型教育プログラム ③フィールドワークを兼ねた地域調査	①コンサルティング（講演・技術指導含） ②監修・翻訳・通訳 ③商品開発・企画	①地域との連携 ②各種展示会・イベント ③地域へのキャンパス開放 ④ボランティア

（出典）人文社会科学系産官学連携を検討する会（2008）59 頁（表 17）を一部修正

理学・工学・医学・薬学などの分野における産学連携の取組みと比較した場合、人文・社会科学系の分野における産学連携は、ローリスク・ローリターンであること（ボランティア的な側面もあること）、対象分野が広範多岐にわたること、成果の汎用性（普及性）が大きく連携当事者に発展性があること（当事者以外にも広く応用される可能性があること）、金銭的な評価が難しく報酬も低額であることといった特徴がみられる（近畿経済産業局 2004）。このような特徴をもつ産学連携の活動から得られた成果は、時として可視化しにくい場合もみられるが、その取組み事例を類型化することにより、企業側からの要望（「どのような連携事例があるかわからない」「連携の成果が見えにくい」等）に対応することも可能となり、大学側としても連携を考える際の目安になることが期待される（兼本 2015）。

今後の大学のあり方と産学連携の取組みに関し、日本学術会議の報告書「産学共創の視点から見た大学のあり方 -2025 年までに達成する地域集約型社会 -」では、ビジョン牽引型ビジネスへの投資と連動した産学連携の推進、各地域の大学を拠点とした情報・データの蓄積と活用、若手の多様な経験の促進を中心とした国際展開と国際プラットフォームの構築、我が国の人文・社会科学を強みにした未来社会戦略と科学の新展開という 4 つの改革の方向性を提示している（日本学術会議 2018）。

このうち人文・社会科学を核とした未来社会戦略に関する提言では、社会の不安定化と将来予測の不確実性が高まるなか、「AI や情報通信技術を駆使した知識集約型社会の構築を目指すなかで、その恩恵を高め、問題点や懸念される課題を事前に解消するためには、地域ごとの特性や歴史的・文化的背景を考慮することが必要であり、人文学の知や社会科学による分析や予見と理念の構築が不可欠となる」との認識を示している。そのうえで、「知識集約型の未来に備えるためには、人文学と社会科学の力、特に深い人間理解や理念と結びついた社会制度の構想、歴史性や地域性への配慮を組み込みながら発展してきた学問分野の力を強化して日本の特色を明確にし、産業も含めた社会全体の戦略を作る」必要性を強調している（日本学術会議 2018）。

人文・社会科学系の学問分野における産学連携の取組みは、明確な課題に対して技術的な解決策を示すという点では限界があるものの、技術課題に先立つ課題設定やコンセプトの提案などには適しているとされる（南 2021）。今日、「「文系」「理系」という学問区分にとらわれず、俯瞰的かつ反省的視点を伴った新たな知の構図が求められる」（日本学術会議 2018）なか、応用の幅が広い「versatile な特徴をもつ」（南 2021）人文・社会系の分野における産学連携活動のより一層の発展が求められている。

〈参考文献〉

近畿経済産業局（2004）『近畿地域における社文系・芸術系産学官連携の推進に関する調査研究』
兼本雅章（2015）「日本における産学連携 - その変遷と文系産学連携を中心に -」『総合政策論叢』（Vol.3）
人文社会科学系産官学連携を検討する会（京都産学公連携機構・財団法人コンソーシアム京都共同事業）（2008）「京都の大学における事例からみた社文系・芸術系産官学連携報告書」
日本学術会議（2018）「産学共創の視点から見た大学のあり方 -2025 年までに達成する地域集約型社会 -」
南了太（2021）「人文・社会系産官学連携の一考察」『産学連携学』（Vol.17, No.1）
文部科学省（2003）「新時代の産学官連携の構築に向けて」（科学技術・学術審議会技術・研究基盤部会・研究基盤部会答申）
文部科学省（2023）「大学等における産学連携等実施状況について（令和 3 年度実績）（調査結果概要）」
吉田健太郎（2014）「文系産学連携の実態と可能性」吉田健太郎（編著）『地域再生と文系産学連携 ソーシャルキャピタル形成にむけた実態と検証』同友館

2. 特 集

佛教大学ウクライナ人道支援企画

社会連携課　　海老原　星太

2022 年 2 月 24 日、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が開始された。

病院や学校、住宅などに被害を与える攻撃を行ない、民間人を含む多くの尊い命が失われることとなった。メディアでは、連日この様子が報道され、ミサイルにより倒壊した建物や、血を流す人々の映像を現実として受け止めることができなかった方は少なくはないのではないだろうか。

この誰もが想定していなかった事態に対し、本学は同年 4 月 1 日付で学長メッセージ「ロシアによるウクライナ侵攻に対する本学の姿勢」を表明した。

学長メッセージ「ロシアによるウクライナ侵攻に対する本学の姿勢」

およそ一か月前から始まったロシアによるウクライナへの侵攻は、明らかに国際的なルールに違反するものであり、平和を希求する世界中の多くの人々の想いを踏みにじる暴挙に他なりません。今回のロシアの侵攻はいかなる観点からも正当化されるものではありません。とりわけ子どもをふくめた多くの一般市民の尊い命が、いまも犠牲となっていることに強い憤りを感じるとともに、大きな悲しみの中にあるウクライナの人々のことを想うと胸がはり裂けるように痛みます。

仏教精神を建学の理念とする本学は、平和な世界の構築に貢献するとともに、人類福祉の増進に資することを目的としてすべての活動を続けてきました。それゆえに、利己的な考え方に基づき、他者のいのちや尊厳を踏みにじるロシアの行いに断固として抗議し、この戦闘の即時停止と、対話による一日も早い平和的な解決を強く求めます。

私たちは、いかなる状況にあっても平和を求め、その実現を目指して対話を続けていかなければなりません。お互いのいたらなさを相互に認めながら、他者および多様性を尊重し、すべての人々の尊厳がまもられる世界の実現を求めていきます。

学生のみなさんには、いま起きている悲惨な現実から目をそらすことなく、自分がなすべきこと、自分にできることをしっかりと考え、平和で豊かな未来の構築に向けて、一緒に歩んでいただけるよう念願いたします。

学長　伊藤 真宏

そして、社会連携センターの組織である「学生ボランティア室」の学生たちの、“何かできることをしたい”という思いを受け、今回の「佛教大学ウクライナ人道支援企画」を実施することとなった。いずれの企画も、学生ボランティア室の学生スタッフや一般学生たちが 7 号館 2 階のボランティア室に集い、皆で意見を出し合って生まれたアイデアにより実現した。そしてそのすべてが、武器購入など戦争に加担することのない人道支援活動のみを行なう団体へ“募

企画のアイデアは学生たちが

ただ募金ではなく“知って募金”

金”することにつながる企画となった。これは、人道支援を受ける側の立場になり、ありがた迷惑にならないよう、困っている方々のニーズに合った支援をしたいという思いが根底にある。こういった学生の思いにより実施した内容を以下に記す。

【募金活動：5 月 11 日～ 5 月 31 日】

①募金活動に対しての協力依頼（HP・B-net・ml）

本企画のスタートとして、募金を行なうことをホームページへ掲載。本企画のために開設した銀行口座を掲載するとともに、募金活動への協力を依頼した。あわせて、本学学生ポータルサイト「B-net」で学生（通学・通信）・保護者へ、メーリングリストを利用して本学教職員に対して依頼を行なった。

学内へ設置した募金箱

②学内への募金箱設置

学生対応部署を中心とした事務局窓口や、学内店舗の計 14 か所へ募金箱を設置した。募金箱は、学生ボランティア室の学生たちが作成し、ウクライナの国旗を構成する青と黄色の 2 色を用いてデザインされた。また、募金箱の横に本企画の趣旨を記したプレートを設置することで、趣旨を理解したうえで募金いただけるよう努めた。

【学内店舗合同企画：5 月 11 日～ 5 月 31 日】

学内店舗協力のもと、以下の企画を実施した。

①ウクライナ支援メニューの販売

5 月 11 日（二条キャンパスでは 5 月 16 日）から 5 月 31 日にかけて、学内店舗にて以下のとおり販売。売上金の一部を募金にあてた。いずれも好評で、提供数は全店舗合計 900 食を超えた。

販売店舗	販売メニュー	金額（円）
1 号館食堂	チキンカツトマトバターソース（ご飯小付）	400
5 号館食堂		
鷹陵館喫茶	ウクライナコーヒー（M・L）	M：120 L：160
	ウクライナフラッペ （ベリー味・バナナ味）	各 350
二条 C 食堂	キーフ風チキンカツレツ定食	420
	キャロットケーキ	120

ウクライナ支援メニューを食べて募金！

②平和啓発コーナーの設置

セブンイレブンおよび大垣書店では、平和啓発コーナーを設置。大学が作成したポスターを設置するほか、平和に関連した書籍の販売コーナーが設けられた。

【フリーマーケット：5 月 23 日～ 5 月 27 日】

礼拝堂付近に、特設販売会場を設置。学生ボランティア室の学生スタッフと社会連携課スタッフで販売を行なった。

教職員および学生ボランティア室スタッフから提供いただいた 200 点以上の物品と、学生と社会連携課スタッフが作成したチャリティーグッズ（バッジ、ステッカー）を販売し、売り上げの全額を募金した。販売にあたっては、より購入しやすいよう、キャッシュレス決済サービス「PayPay」を導入し、その運用も学生たちが行なった。

フリーマーケットの様子

【カルヤーナ・ミトラ、傳道部による托鉢（たくはつ）】

フリーマーケットの傍ら、宗教教育センターの学生サポーターである「カルヤーナ・ミトラ」と、本学公認の課外活動団体である「傳道部（でんどうぶ）」による托鉢を実施。袈裟に身を包んだ学生が、学生ボランティア室が作成した募金箱を手に、募金を呼び掛けた。さらに学生ボランティア室の学生も参加。組織を越えた活動が行なわれた。

カルヤーナ・ミトラ、傳道部、学生ボランティア室が合同で実施

【ウクライナパネル展：5 月 23 日～ 5 月 27 日】

ウクライナの現状や文化、本企画を実施した趣旨を知っていただいたうえで募金いただくために、フリーマーケット会場横でパネル展を実施した。パネルには、学長メッセージのほか、学生ボランティア室の学生の思いも展示。“本企画が、ウクライナの現状を知る第一歩となれば”という思いが記された。

学長メッセージや学生の思いなどを
パネルにして展示

【集まった募金を日本赤十字社へ寄付】

本企画を通して集まった募金額は、合計 483,489 円。6 月 22 日に日本赤十字社京都府支部へ寄付した。寄付にあたっては、カルヤーナ・ミトラ、傳道部、学生ボランティア室、社会連携課スタッフが日本赤十字社京都府支部を訪問し、上田事務局長より、「赤十字では、ウクライナという地域で起こっている紛争に巻き込まれ、助けが必要なすべての人々に人道活動を行なっており、ご寄付を役立てる」と約束いただいた。

募金額の内訳

内容	金額（円）
募金活動（托鉢含む）	368,633
学内店舗合同企画	17,820
フリーマーケット	97,036
合計	483,489

日本赤十字社京都府支部にて

【まとめ】

誰もが一刻も早く、この事態が終結することを祈っているに違いない。しかし、執筆現在（2023 年 5 月）も終結には至らず、尊い命が犠牲となっている現状は続いている。

国と国同士、私たちが知ることの無いさまざまな事情があり、今回の事態に至ったのであろうし、どちらが悪いかという議論をすることは的外れな気がする。“どっちも自分が正しいと思ってるよ。戦争なんてそんなもんだよ。”と、幼いころにドラえもんが言っていたセリフを未だに覚えている。我々命あるものができることといえば、民間人、軍人を含め、約 13 万人（2023 年 2 月現在）以上の尊い命が失われたこの事実をしっかりと現実として受け止め、この過ちを二度と繰り返さないことではないか。

そういった意味で、今回の「佛教大学ウクライナ人道支援企画」には、多くの学生、教職員の参加があった。皆さんに、日本から 8,176km 離れたウクライナで起こっている残酷な現状を伝えるとともに、佛教大学構成員一人ひとりが、“自分ごと”としてとらえ、平和について考えるキッカケをつくることができたのであれば、実施した意義はあったのではないであろうか。侵攻開始から 1 年がたち、報道される数は少なくなったが、決して過去のこととして風化させず、この思いを持ち続けていただければ、本企画に携わった一人として嬉しく思う。

最後に、真っ先に何かできることをしようと行動した学生たち、そして本企画実施にあたりご協力、ご賛同をいただいた方々に感謝するとともに、一刻も早く事態が終結すること、お亡くなりになられた方々のご冥福を祈るばかりである。

3. 連携事業の取組み

① 2022 年度二条駅地域安全ネットワーク活動報告

社会学部　准教授　　山本　奈生

1. 二条駅地域安全ネットワークの概要

二条駅地域安全ネットワークは、京都市中京区役所地域力推進室が所管する施策であり、2014 年に発足して現在まで活動が継続されている。主たる目的は地域防災および防犯（交通安全を含む）の両面において、広く安全かつ安心に住まうことのできる地域づくりを推進し、地元自治会、当該地域における民間事業者、大学機関、地方自治体が横断的に住民参加型の事業として展開することにあるといえる。活動の具体的な範囲として言えば、JR 二条駅を中心として見た時、学区としては朱雀第一、第五、第六学区が交差する範囲にあり、より広く見れば朱雀第二、第四学区を含む地域である。

本ネットワークは、こうした街区において行政としては中京区役所（二条城事務所を含む）、同消防署、同警察署の三者が参与し、住民としては上述各学区の自治会が、また事業者として三条会商店街、JR 二条駅、BiVi 二条、近隣スーパーやコンビニエンスストア、駐輪場管理業者などが参与する、横断的性質を有するものである。本学は二条キャンパスとの関係性があり、また有識者として教員の参与（本年度座長：山本奈生、協力教員として保健医療技術学部の白井はる奈准教授）が継続されてきた。

＊ 本概要は定期報告書という性質上、昨年度の自身が記した同概要欄から一部抜粋した。

2．本年度の活動と、次年度の展望

2022 年度は、2000 年度より続いてきたコロナ対応を念頭に置き、本学学生や地域住民の参加する場での活動は十分に行なえなかった。6 月に中京区役所地域力推進室と教員間でメール連絡会を行ない、6 月 23 日に JR 二条駅前に以前より本ネットワークによって設置されてきたプランターの花を植え替える取り組みが行なわれた。

また 7 月 31 日に、白井准教授の紹介で、本ネットワークと関係する「二条駅かいわいまちづくり実行委員会」の主催にて「二条駅かいわい夏祭り」が行なわれ、夏祭りに本ネットワークの小ブース出展が行なわれた。一方で、秋以降により本格的な活動を実施することはできなかった。

次年度はコロナの感染症法の位置づけが変化する見込みであると報じられている。もちろんすぐに 2019 年度以前の活動状況へと移行することは難しいだろうが、本年度よりも具体的な活動を多く行なっていく中で、地域社会、大学、各関係団体とのコミュニケーションをより良くとれるようにしていきたい。

②モデルフォレスト運動

社会連携課　**海老原　星太**

【モデルフォレストについて】

モデルフォレストとは、1992 年の世界地球サミットの際にカナダが提唱した持続可能な地域づくりの実践活動のことで、森林保全、森林生態系における健全性の維持と回復、景観保護や、観光を含めた経済活動の増進等、森林を持続可能な方法で守り育てることを目的としている。

京都府では 2006 年 4 月に「京都府豊かな緑を守る条例」を施行し、世界に広がる森林再生事業が提唱され、この取組みを進めており、同年 11 月には、日本で初めて、この運動の推進主体となる『公益社団法人京都モデルフォレスト協会』が設立。以降、府民ぐるみで活動に取り組んでいる。

【佛教大学のモデルフォレスト】

本学は、南丹市美山町宮脇地区（みやわき Billy：地元のボランティア団体）・三共精機株式会社・公益社団法人京都モデルフォレスト協会・京都府・南丹市と 2008 年 2 月に連携協定を締結し、美山町宮脇地区「つながりの森」でのモデルフォレスト運動に参画している。

【「つながりの森」について】

京都府南丹市美山町宮脇地区にある 205ha の山林で、ここでの活動のコンセプトは「つながりの森づくり」。

日ごろ自然に触れることの少ない大学や企業の関係者が、地元の美山町や京都府、南丹市の方々と共に活動する機会を通して、

・「人と自然」とのつながり

・「人と人」とのつながり

・植えた木の成長と同時に、植えた人の未来へつながる「現在と

未来」のつながり

を大切にしたいと願い、「つながりの森」と名付けられている。

そのため、ここでの活動では、植林や間伐、下草刈り、遊歩道の整備といった作業のほかに、季節に応じてバーベキューや炊さん、川遊びなどを参加者みんなで楽しみ、活動後にはみんなが笑顔になっている、そんな活動を続けていきたい。

【ホームページに専用ページを開設】

2023 年 3 月、本学ホームページ上に、モデルフォレスト専用ページを開設。こちらも新たに作成した活動紹介動画を掲載した。これは、本学のモデルフォレスト運動を、より多くの方に知っていただき、より多くの「つながり」をつくるキッカケとすることを目的としている。ここでは、これまでの活動を一覧にして掲載しているので、ぜひご覧いただき、参加してみたいという思いを持っていただければ幸いである。また、取り組んでみたい活動のアイデアもぜひ！

（URL:https://www.bukkyo-u.ac.jp/institution/business/modelforest/）

モデルフォレスト専用ページ

【2022 年度の活動】

2022 年度第 1 回の活動は、9 月 10 日。約 3 年ぶりの学生参加が叶った。学生 19 名、教職員とその家族を含む 18 名を合わせた計 37 名が本学から参加。連携機関や地域の方々など合わせて総勢 50 名を超える参加者が美山町の宮脇地区に集った。ウィズコロナの中、感染症や熱中症対策に留意をしながらの活動となったが、美山町の森林の状況や林業の歴史、田んぼの水路についてのお話を伺いながら散策を行なった後、丸太を自分たちで切り落として敷物や置台を作ることや、地元のお米を釜で炊くことなどに取り組んだ。

第 1 回の活動では、「つながりの森」での活動はできなかったが、多くの方が集い、組織の垣根を超え、笑顔があふれる活動ができたことは、コロナ禍で失われてしまっていた、この取組みの本来の姿を取り戻すことができたように感じた。

第 2 回の活動は、11 月 19 日。紅葉深まる秋景色の中、「つながりの森」での活動が実現。学生（6 名）と教職員（8 名）の計 14 名が参加し、連携機関や地域の方々など合わせた総勢 20 名で、遊歩道の丸太階段改修作業に取り組んだ。丸太を運び、杭を打ち、みごとに階段が完成した。「つながりの森」を自分たちの手で改修したことにより、参加者のモデルフォレストへ運動の参画意識が高まったのではないだろうか。

続いて、宮脇地区の道相神社の落ち葉清掃を実施。参加者同士で見事な連携プレーをとり、みるみるうちに落ち葉で埋もれた境内が綺麗に。初対面であっても、声を掛け合い同じ作業に汗を流すことも、この活動の魅力である。

そして、汗を流した後は、地鶏や牛肉を材料にバーベキュー！ご飯はもちろん釜炊きで。お肉を焼く人、ご飯をよそう人、お茶を配る人…こちらも参加者同士の連携をとり、皆でおいしくいただいた。“同じ釜の飯を食う”とよく言うが、まさに釜でご飯を炊き、調理に関わり、話をしながら同じものを食べることで、参加者同士の親睦を深めることができた。

第 3 回の活動は、3 月 19 日を予定していたが、1 月の大雪の影響で現地での作業を断念。今後は、現地での作業が中止せざるを得ない場合に、本学として取り組んでいけることを模索していきたい。

【今後の活動について】

2022 年度の活動は、久しぶりの学生参加で、コロナ禍ということもあり、単発的な体験型の活動がメインとなった。これはもちろん、“学生の経験”や“環境に対する意識を高める”ことや“地域と学生をつなげる”という意味では、意義のある活動であったと考える。今後は、こういった体験型の活動も盛り込みながら、「つながりの森」を作っていくような継続的な活動に取り組みたい。

さらに、今年度はカメラ好きの職員が、美山町の自然や活動の様子を高クオリティで撮影し、大活躍！みんなの個性を活かして、楽しくつながれるような、そんな場所にしていきたい。

③浄土宗との連携事業

第８回浄土宗宗門関係大学社会連携企画報告会
テーマ「共生（ともいき）　～コロナ禍で紡ぐ新たなご縁～」

社会連携課長　　山下　仁男

浄土宗宗門関係大学社会連携企画報告会は、浄土宗と西日本の宗門関係大学（京都華頂大学・華頂短期大学、京都文教大学・京都文教短期大学、東海学園大学、佛教大学）が、学生による社会連携活動の発表、報告と交流を目的として開催している。2022 年 12 月 17 日（土）、実に 3 年振りとなる本事業が、京都華頂大学・華頂短期大学を幹事校・会場校とし、参加者が一堂に会して開催された。

本学からは、社会連携センタープロジェクト「知ってる？パラスポーツの魅力～ Do You Know the Power of Parasports ？～」より、保健医療技術学部作業療法学科の 4 年生 2 名が発表を行ない、パネルディスカッションにも参加した。

この 3 年間、世界中の人々の生活に影響を及ぼしたコロナ禍。各大学の学生たちは、その中での模索や工夫しながら活動を続けた事例などを発表し合った。パネルディスカッションでは、テーマであるそこで紡がれた新たなご縁に焦点を当て、意見交換が展開された。

本来であれば、その後には大学の垣根を越えて、学生や教職員が交流する時間があるが、残念ながら今回は挨拶程度で解散となった。参加者も発表者や関係者が大半を占めるなど、課題はいくつかあるにせよ、確実にこういった機会が復活している。

また、発表者が準備に時間をかけるのと同様またはそれ以上に、事務局では開催に向けて多くの時間を費やしている。改めて、幹事校の皆様には御礼を申し上げたい。今回、数度にわたる参加大学や浄土宗（社会部）との打ち合わせもオンラインで行なわれ、開催当日に初めて名刺交換をするなど準備の仕方も変化があった。これらも、コロナ禍による新たなご縁の紡ぎ方。せっかく芽生えたこのご縁を、また別な形でも紡ぎ出していきたい。

【第 8 回浄土宗宗門関係大学社会連携企画報告会】

開催日：2022 年 12 月 17 日（土）13：30 ～ 16：30
場　所：京都華頂大学・華頂短期大学　6 号館華頂ホール
主　催：浄土宗、京都華頂大学・華頂短期大学、京都文教大学・京都文教短期大学、
　　東海学園大学、佛教大学
第 1 部：①京都文教大学・京都文教短期大学
　　京都文教大学地域連携学生プロジェクト「REACH」
　　京都文教大学地域連携学生プロジェクト「KminK」
　　②東海学園大学
　　東海学園大学教育学部　西淵研究室
　　③佛教大学
　　社会連携センタープロジェクト「知ってる？パラスポーツの魅力～ Do You Know the Power of Parasports ？～」 ※作業療法学科 4 年生 2 名発表

④京都華頂大学・華頂短期大学

絵本お話出前クラブ「ぐりとぐら」

現代家政学部食物栄養学科

第２部：パネルディスカッション

コーディネーター　堀出　雅人（華頂短期大学総合文化学科准教授）

学生パネラー６名　※作業療法学科４年生１名参加

第８回浄土宗宗門関係大学社会連携企画報告会

共生（ともいき）

～コロナ禍で紡ぐ新たなご縁～

浄土宗宗門関係大学が地域社会等と連携して行った取組を報告します。
コロナ禍の中で、さまざまな工夫を凝らして展開された実例をもとに、今後の新たな活動を展望します。

日時：令和4年12月17日（土）

13:30～16:30（受付13:00～）

会場：京都華頂大学・華頂短期大学

6号館4階「華頂ホール」

入場無料・事前申込不要

（参加対象：宗門関係者、参加大学の学生・教職員など）

プログラム

第1部　13:30～　開会の挨拶・趣旨説明
13:40～　取組報告
京都文教大学・京都文教短期大学
東海学園大学
佛教大学
京都華頂大学・華頂短期大学

第2部　15:20～　パネルディスカッション
16:10～　総評・閉会の挨拶

Access

【お願い】
来場の際は、感染予防のためマスクの着用をお願いいたします。

【お問い合わせ先】
京都華頂大学・華頂短期大学　総務部総務課
〒605-0062　京都市東山区林下町3-456
TEL：075-551-1188
E-mail：soumu@kyotokacho-u.ac.jp

【アクセス】
◆京阪本線　祇園四条駅[出口7]から東へ徒歩10分
◆京都市営地下鉄（東西線）東山駅[出口2]から南へ4分
◆阪急（京都線）京都河原町駅[出口1]から徒歩13分

※来場者用の駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用ください。

主催：浄土宗　京都文教大学・京都文教短期大学　東海学園大学　佛教大学　京都華頂大学・華頂短期大学

各大学の取組など

京都文教大学・京都文教短期大学

京都文教大学地域連携学生プロジェクト「REACH」

就労支援継続支援事業所との交流や、一般の方を対象にした視覚障がいをテーマにしたイベントなどを通して、障がいをもつ方や依存症の方など少数者に対する偏見や「壁」のない地域社会を目指し活動しています。

京都文教大学地域連携学生プロジェクト「KminK」

久御山町役場と連携し、町内の自治会活性化など、町の課題解決を目的に、今年度誕生したプロジェクトです。くみやまちとLinkする、という思いから「KminK」と名付けました。

東海学園大学

東海学園大学教育学部　西園研究室

「間伐材を活用したおもちゃ作りを通した地域貢献」

東海学園大学では、建学の精神である「ともいき」の理念を具現化するため、岐阜県中津川市との協定に基づく、「令和ともいきの森」への植林活動を授業化し、実践的SDGs教育を実施しています。2020年度からは、この授業を受講したゼミ生を中心にトヨタ産業技術記念館主催の「週末ワークショップものづくり親子教室」にボランティアとして参加し、おもちゃ作りを通して学修成果を地域に還元しています。

佛教大学

社会連携センタープロジェクト

「知ってる？パラスポーツの魅力 ～Do You Know The Power of Parasports？～」

作業療法学科の学生が中心となり、パラスポーツの魅力を広め、共生社会について考える活動をしています。パラアスリートの講演会の開催、ボッチャ、ツインバスケなどのパラスポーツ体験、学内にパラスポーツ書籍コーナーの設置などを行ってきました。地域の子どもや高齢者と、パラスポーツを通した交流会も計画中です。

京都華頂大学・華頂短期大学

絵本お話出前クラブ「ぐりとぐら」

「『お話出前活動』を通した地域の子どもたちとの交流」

地域の子どもたちとの交流を目的として、依頼をいただいた保育園や幼稚園、施設などで絵本の読み語りや手遊び、ペープサートなどの活動をしています。
また、ペープサートや巻物絵本などを自作し、本クラブならではの活動ができるように取り組んでいます。
保育者養成課程の学生が将来に向けて、子どもを楽しませる技術を身につけられる場となっています。

現代家政学部　食物栄養学科

「食品ロス削減のために私たちができること」

京都華頂大学現代家政学部は、生活者の視点から、暮らしの中にある衣食住の諸問題を包括的に取り扱うことを特徴としており、その中で食物栄養学科では食品ロス削減や地域循環型食生活の啓発活動を行っています。今回は、京都市環境政策局と連携して実施した食品ロス削減啓発のミニ講義と、大学祭で実施したフードドライブを中心に報告します。

浄土宗

浄土宗の教えを教育理念や教育方針としている関係学校のことを宗立宗門校と言います。
浄土宗とは、阿弥陀さまの平等のお慈悲を信じ、「南無阿弥陀仏」と称えて、人格を高め、社会のためにつくし、明るい安らかな毎日を送り、お浄土に生まれることを願う、法然上人が開かれた仏教の宗派です。

④京都市くらし安全推進課・京都府北警察署との防犯啓発物作成（映画部・漫画研究会）

社会連携課　海老原 星太

１．客引き行為等の禁止等に関する条例に関する防犯啓発物

京都市では、公共の場所における安心かつ安全な通行を確保するため、「京都市客引き行為等の禁止等に関する条例」を、2015（平成 27）年４月に施行している。昨今、大学生が「客引き行為を行なった」として指導を受けるケースが増えており、特に大学生に対する啓発を行なうことを目的として、京都市くらし安全推進課から依頼があり、当課指導のもと、条例違反防止を促すリーフレットを、本学の漫画研究会と映画部が合同で作成した。

リーフレットは、漫画研究会が内容やデザインの全てを担当。条例違反者の氏名等が京都市のホームページに掲載されることや、客引きを行なう店舗を利用した際のデメリットなどを漫画で紹介している。また、映画部は２種類の動画を作成した。リーフレットに掲載されている QR コードを読み取ると、京都市公式 YouTube チャンネル（CityOfKyoto）で配信されている、通常版（16:9 画角）とショートバージョン（9:16 画角）の２本の動画を視聴することができ、学生の視点で条例違反をした際のデメリットを訴えかけた。

漫画研究会がデザインしたリーフレット①

漫画研究会がデザインしたリーフレット②

通常版

ショート版

映画部が作成した動画はコチラから

そして、2023 年 5 月 29 日、京都市くらし安全推進課と合同で、「京都市客引き行為等の禁止等に関する条例」の啓発活動を実施。活動には、リーフレットの制作に携わった漫画研究会・映画部の学生と、社会連携センタープロジェクト「防犯啓発・立ち直り支援プロジェクト」に取り組む社会学部 作田誠一郎教授のゼミ生が参加した。

第一部は、大学生が「客引き行為を行なった」として指導を受けるケースが増加していることから、客引きアルバイトをしないよう呼び掛けることを目的として学内で実施し、第二部では、河原町通（河原町蛸薬師西入付近）で通行中の市民や観光客の方を対象に、客引きを行なっている店舗を利用しないよう呼び掛けた。

【第一部】
「客引き禁止！」ジャケットを着用し配布し、学生を対象に客引きをしないよう呼び掛けた

【第二部】
河原町通にて客引きを行なう店舗を利用しないよう呼び掛けた

2. 自転車盗難防止に関する防犯啓発物

京都市内で最も多い犯罪は「自転車盗難」である。こちらも大学生が被害者となるケースが多く、その防犯啓発を目的とし、京都府北警察署から本学の漫画研究会および映画部に啓発物の作成依頼があった。漫画研究会は懸垂幕を、映画部が動画を担当し、両団体ともに京都府北警察署からの指導のもと、学生目線で作成した。懸垂幕のイラストデザインと動画のストーリーはリンクしており、懸垂幕には、「思い出に　自転車に　鍵をツーロックで」というキャッチコピーを記載し、母親からのプレゼントである大切な自転車が盗難にあわないよう、自転車のツーロックの大切さをイラストで表現している。映画部の動画のキャッチコピー

は「自転車に愛“錠”を。」とし、こちらも、母親からのプレゼントである自転車が盗難にあうというストーリーで、45 秒程度の動画ながら、被害にあいやすい場所や、ツーロックの大切さをコンパクトにわかりやすく表現している。

映画部が作成した動画は、京都市公式 YouTube チャンネル（CityOfKyoto）で配信されており、懸垂幕は、今後、京都市内の商業施設等、自転車盗難が起こりやすい場所に設置されていく予定である。

漫画研究会がデザインした懸垂幕

映画部が作成した動画
←こちらより視聴できます

3. まとめ

課外活動は学生の自主的な活動であり、漫画研究会、映画部それぞれ、日ごろは所属する学生の興味のあるものを作成している。今回は、行政機関からの依頼のもと、日ごろは作成することのないテーマに挑戦してもらった。その中で、学生たちは前向きに、各機関からの指導を受けながらも、学生目線の意見を積極的に提案してくれた。防犯啓発活動時においても、配布に苦戦しながらも常に笑顔で、慣れない作業に取り組む姿には、職員として心に響くものがあった。そして、この取組みを通じて、このような素直で前向きな学生こそ、佛教大学の宝であると再認識させられた。

⑤京都市立北総合支援学校との連携事業

社会連携課長　山下　仁男

■きっかけ

紫野キャンパス1号館の社会連携課から、北大路通に隣接する12号館や15号館へ向かう途中に、京都市立北総合支援学校サテライト教室「楽只館」がある。ここでは月曜から水曜にかけて、同校高等部の生徒が、地域に開かれた水曜市やスマイルカフェの運営（製菓・接客など）、製品開発（クラフト製品作りや地域へのリーフレット配付）、公園清掃や水耕栽培等の環境デザインといったワークスタディに取り組んでいる。これらは作業学習を中心に、地域での貢献活動や実習、仲間との協働活動を通して「はたらく力」や「生活する力」を高め、社会経験を積み重ねることを目的としている。

しかし、私はそのことを知らなかった。キャンパス南側の公園のそばに、何かカフェらしきものを備えた施設がある程度の認識しかなかった。

2021年12月下旬、そんな私を訪ねて、教育職インターンシップ生を受け入れていただいている北総合支援学校から、当時の副教頭先生とご担当の先生がお見えになった。副教頭先生は、学校での取組みの説明に加え、次のような思いを述べられた。

・地域との関係や活動範囲を広げる意味で、以前から佛教大学と連携したいと考えていた。コロナ禍で延びてしまったが、改めて相談させていただきたい。

・生徒たちは、学校では自分らしくふるまえるが外に出るとおそらく委縮してしまう。今後、社会に出ていくため、少しずつ外に出て、いろいろな人と触れ合いながら働く体験をさせたい。知らない人に声をかけたり、地域と関わるドキドキ感や緊張感を経験し、今後の就職活動などにも役立つ自信をつけさせたい。そこに学生さんが関わっていただけたら…

この、生徒たちへの熱い思いが私の心にストレートに飛び込んできた。

だが、このあとの年末年始は新型コロナウイルス変異株の流行も発生。1月中旬には京都府でも1日あたりの感染者数が最多を記録し、本学の各種活動基準レベルも引き上げられた。これにより学外者入構についても規制が強まり、この状況では話を進めて行くことができず、次年度への持ち越しとすることをお願いせざるを得なかった。そして3月、副教頭先生からお電話で、ご挨拶したお二人ともが異動との連絡をいただいた。

「この取組みは後任にも引き継ぎます。どうか実現できますよう、よろしくお願いします」

電話口での副教頭先生の言葉が、その後もずっと胸に残っていた。

■連携事業（2023年1月24日）

次に北総合支援学校との接触は11月末まで空いてしまった。言い訳にもならないが、その間、我々が取り組んでいた諸々のことは、本年報の他のページを参照いただきたい。

新たな副教頭先生とのやりとりを経て、2022年12月6日、高等部指導部長の先生やワークスタディご担当の先生方にもお越しいただき協議を再開した。ご希望は、1月23日の週以降で、清掃活動と物品販売の2班に分かれて活動を行ないたいとのことであった。その週は本学でも授業最終週であり、私自身も「ここしかない」と、年末年始の休業期間もふまえて急ピッチで調整を始めた。

学内調整においては内田部長や作田機構長にお手数をおかけした。また、副学長の原清治先生や、教職支援課を通じて教育職インターンシップの科目担当者である大林照明先生にもご協力をお願いした。

併せて、北総合支援学校の先生とは何度もメールをやり取りし、開催日の決定や、当日のキャンパス内の状況を想定しながら、生徒の活動に際してこちらが配慮すべきことなどを考えうる限り問い合わせた。それらをふまえて１月 19 日にはキャンパス内の下見をしていただき、プログラムの打ち合わせを行なった。

そのようにして迎えた開催当日の朝、翌日からの大雪を予感させる冷え切った風の中、16 名の生徒がやって来てくれた。清掃班は持ち込んだ用具を携えて教室へ、物品販売班は建物１階ロビーでのブース設置と陳列から、と分かれて活動開始。

清掃活動では、教室の大きさに驚きながらも楽しそうに、机の雑巾がけや窓拭きなど、各自ができる活動に熱心に取り組んでいた。時おり「ここ拭けてないで！」と言い合う様子なども。

販売では「いらっしゃいませ！」の声かけや商品説明、タブレットを用いたレジでの代金のやりとり、商品の受け渡しなどを分担。終了時にはやりきった表情で「緊張した！」「楽しかった」と笑顔が見られた。用意されたクッキー等の焼き菓子は全て売り切れた。

また、大林先生の呼びかけで、急きょ２名の学生が各自の予定を変更して協力してくれ、生徒と一緒に活動した。北総合支援学校の小田校長先生もお忙しいなかお見えになり、「普段は見られない生徒の姿を見せてもらえた」と感謝を述べていただけた。

■今後に向けて

このように、多くの方々の想いが集まり合って、第１回目の連携事業が実施できた。最後の挨拶をしてくれた皆さんに私がお返しできたのは、「また来てくださいね!」の言葉だけ。生徒の皆さんには、近くにありながら、おそらく初めて足を踏み入れたキャンパスと、そこでの活動をどのように感じてもらえたであろう。

今回は、初めの一歩。とにかく踏み出すことができた。これをきっかけに、今後も交流が続いて行くことを願う。この連携事業が生徒の皆さんの世界を広げ、少しずつでも自信を積み重ねていく場になって欲しい。本学の学生たちにとっても、生徒の皆さんとの交流はもちろんのこと、総合支援学校の授業をキャンパス内で体験できる貴重な機会でもある。ぜひ活用して欲しい。本学がキャンパス内に有する様々な資源や人材。これらを組み合わせれば、長い目で見て多様なプログラムを総合支援学校の皆さんと一緒に構築していけるのではないか。様々な新しいつながりが生まれて行くことを信じている。

そして、初めに私にこの連携を持ちかけてくださったお二人の先生方が、この第一歩をどこかで耳にし、きっと喜んでいただけているであろうことも信じている。

物品を販売する
生徒の皆さん

美味しいと
大好評でした！

「広い教室！」と
驚きの声も

学生も一緒に
活動しました

4. Topics

①ホテルと地域社会の繋がり構築、魅力発信を佛大生が提案！

社会連携課　宮本　泰子

1.　プロジェクトの概要

ホテルとまちの魅力発信プロジェクトは、株式会社西松地所が運営する「タッセルイン京都河原町二条」と「タッセルホテル三条白川」と連携して進めるプロジェクトである。2021 年に開業して間もないホテルであることから、地域社会との繋がりの構築を目指して、本学に声をかけてくださった。

京都は日本でも有名な観光地ではあるものの、桜シーズン･紅葉シーズン以外は観光客数が減ってしまう。また、アフターコロナに向けて外国人観光客の誘致が必要であることなど、観光都市としての課題もある。これらの課題解決方法を検討すること、また、ホテルと地域社会が繋がるきっかけを学生が提案することを主な取り組みとして、新規プロジェクトを開始した。まだまだ始まったばかりではあるが、これまでの学生たちの企画・提案内容と、今後の取組み計画についてまとめたい。

2.　ホテルの見学会

プロジェクトに関心のある学生を対象に、両施設の見学会を行なった。「タッセルイン京都河原町二条」はシンプルでカジュアルな客室があり、出張などのビジネス利用向けの街中のホテルである。また、「タッセルホテル三条白川」は、より落ち着いた雰囲気と贅沢感があり、大人の観光に最適な雰囲気がある。学生はホテルスタッフのお話からも刺激を受けた様子で､帰りのバスでは「雨の日マップ」や「ちょい飲みマップ」の作成、インスタグラムの活用、佛大生が選ぶ隠れ家カフェの紹介など、複数の案が出た。

3.　今後の取り組み

学生のアイデアとホテルの客層に関する情報（半数以上が外国人観光客とのこと）を元に、「外国人観光客向けワークショップ」､「期間限定カフェの運営」､「情報発信」の 3 つのグループを設定した。外国人観光客には書道体験（英語名を漢字で表記してプレゼントするワークショップ）や折り紙体験が受け入れられるだろうし、学生にとっては外国語を活かすチャンスである。カフェの運営においては京都ならではの付加価値について考えたり、予算を組むことは学生にとって貴重な経験となるであろう。カメラや SNS など、好きなことを活かした情報発信に興味がある学生も一定数いることが予想される。今後､本格的に学生メンバーを募集し、2023 年度からは社会連携センタープロジェクトとして具体的な取組みを実施する予定である。

観光において重要である「コト消費」を通して、少しでもホテル利用者の経験価値を創出することができれば学生の成長ややりがいに繋がることが期待できる。今後の取組みを通してホテルと地域が繋がることにより、本学と地域社会との結びつきも、タッセル（飾り房）のように紡がれていくことを願っている。

②学生がアプリ開発に協力！

社会連携課　**海老原　星太**

トレーニングルームにおける学生指導や、硬式野球部のトレーナー派遣などを、本学が約20年にわたって依頼しているラグスタ株式会社より、スマートフォン専用アプリ「KYOTOカロリーマップ」の開発において、アプリ内企画に学生のアイデアを取り入れたいと依頼があり、有志の学生15名が協力。本アプリは2023年4月にリリースされ、学生が立案した企画が実装されている。学生の取組みを以下にまとめる。

「KYOTOカロリーマップ」ロゴ

●アプリの概要

京都の「観光」と「健康」をかけ合わせたスマートフォン専用アプリケーションで、歩いたカロリーに準じてポイントが付与され、京都市内の提携店舗や市内で展開するサービスをポイントで引き換えることができる。

●活動の流れ

3グループに分かれ、それぞれペルソナ（ターゲット）を設定し、アプリ内の一つの機能「おすすめコース」を作成する。

（成果物）

グループ	コース名	コース	ペルソナ
A	丸太町周辺散策コース	神宮丸太町→喫茶いのん→平安神宮→岡崎神社→Green Terrace→銀閣寺→出町柳	20代女性
B	御朱印帳集めin東山	平安神宮→岡崎公園→京都岡崎蔦屋書店→チェカ→南禅寺→方丈庭園（南禅寺）→水路閣→蹴上駅	26歳女性／滋賀県出身・在住／会社員（事務）
C	ショッピング＆映えコース	京都駅→京都タワー→Waldenwoods Kyoto→大丸京都店→錦市場	28歳女性／東京出身大阪在住／会社員（営業）

●まとめ

まず、短期間で成果を出した学生に拍手を送るとともに、機会をいただいたラグスタ株式会社に感謝申し上げる。本企画の依頼時に、“多くの佛大の学生を見てきたが、どの学生も素直で何事にも熱心に取り組んでいる。本活動を通じて成長につなげてほしい”との言葉をいただいた。このように企業と学生の信頼関係から生まれることに、産学連携の本質を感じた。企業・大学双方のメリットが求められる産学連携事業であるからこそ、人と人の信頼関係を構築し、企業、学生と共に成長できる大学でありたい。

アプリ内で使用された画像

③ぶつだいちびっこひろば活動報告について

保健医療技術学部　准教授　　白井　はる奈

1. はじめに

2022 年 11 月 6 日（日）、本学二条キャンパス 1 階エントランスにて、乳幼児や小学生を対象にした「ぶつだいちびっこひろば」を開催した。2015 年より、二条駅かいわいまちづくり実行委員会と協力し、毎年夏に開催していたが、感染症拡大の影響による中止を経て 3 年ぶりの開催であった。ちびっこひろばの企画、運営を行ないたくて佛教大学の作業療法学科に入学してきたという学生もおり、念願の「ぶつだいちびっこひろば」であった。

社会連携センタープロジェクト「知ってる？パラスポーツの魅力」や、学生企画まちづくりプロジェクト採択団体「カンパニオ」で活動する学生をはじめとする作業療法学科の学生たちを中心に、授業や国家試験受験勉強の合間をぬって企画、準備を行なってきた。当日は 80 組を超えるご家族に参加して頂き、楽しい時間をともに過ごすことができた。以下、当日の様子を写真とともに紹介する。

2. 活動概要

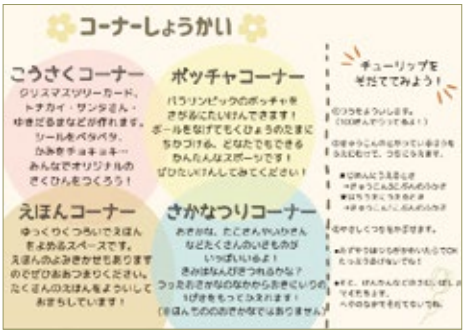
(1) 受付、スタンプラリー

受付では来場者に手指消毒と検温へのご協力をお願いし、スタンプラリーの台紙をお渡しし、笑顔でお迎えした。

スタンプラリーは、学生と来場者がコミュニケーションを取れるように、また密を避けて来場者が分散するようにといった意図で学生が準備した。スタンプラリーを終えた来場者には、チューリップの球根を参加賞としてお渡しした。自宅でも家族で土に触れる経験をしてほしい、植物を育てる楽しみを感じ、春に花が咲く喜びを感じてほしいという学生の想いが込められていた。

(2) 工作コーナー、魚釣りコーナー、絵本コーナー

工作コーナーでは、乳幼児から小学生まで楽しめるようなものを準備した。台紙を準備し、シールを貼るだけで完成するクリスマスカードや、フェルトで作るクリスマスオーナメントなど、学生が事前にパーツを準備し、来場した子どもに合わせて作業の難易度を調整し、笑顔で一緒に作業していた。



魚釣りコーナーでは、かわいい海の生き物のイラストをラミネート加工し、クリップをつけ、磁石のついた釣り竿で釣ってもらい、釣れた中から好きな魚を一匹お持ち帰りいただいた。こちらも大盛況で、当日慌てて海の生き物を追加で作成しなければならないほどであった（二条キャンパス事務課と社会連携課の皆さま、ご協力ありがとうございました）。

絵本コーナーのレイアウトも学生が考え、絵本の面展台は段ボールで作成し、学生がおすすめ絵本の POP を作成し、絵本とともに展示した。「絵本の森」をイメージし、エントランスの壁には来場者を見守る大きな木を紙で作成し掲示した。来場者にはマット上で自由に絵本を楽しんで頂き、学生による絵本の読み語りの時間も好評であった。

(3) ミニボッチャ

パラスポーツの１つであるボッチャを体験してもらえるコーナーを、「知ってる？パラスポーツの魅力」のメンバーが主となり運営した。乳幼児でも楽しんで頂けるように、ボールを転がす斜面を段ボールで学生が作成し、ボッチャカラーの青と赤で色を塗って仕上げるなど、当日までの準備にも時間をかけており、来場者に楽しんでもらいたいという学生の気持ちが伝わってきた。

3. まとめ

午前中の２時間だけの開催であったが、多くのご家族にご参加いただき、トラブルなく無事に開催でき、学生も充実感と達成感を感じていた。「以前参加して楽しかったので、再開を待っていました」と声をかけてくださる方、「おねえさん、おにいさんがやさしかった」と言ってくれる子どもたち。みんなが笑顔になれるいい時間であり、これからも地域貢献事業として継続していけたらと思う。

5. 社会連携センタープロジェクト

①防犯啓発・立ち直り支援プロジェクト

社会学部　教授　　作田　誠一郎

1．本プロジェクトの概要

本プロジェクトは、各種防犯の啓発活動を実施するとともに、青少年を対象とした立ち直り支援の実施を活動の中心に位置付けている。未だに新型コロナの感染対策は必須であり、活動に際しても感染予防に留意しながら新たな企画を始動した。

ところで、近年の少年非行は、少年による刑法犯等の検挙人員をみると 2004 年以降減少傾向を維持している。この傾向は少子化の影響も考えられるが、一方で大麻取締法違反は 2014 年以降増加に転じている。またこれまであまり犯罪に関わってこなかった少年たちが、特殊詐欺などに着手するケースも増えている（『令和 4 年版犯罪白書』）。

図１　少年による刑法犯・危険運転致死傷・過失運転致死傷等
（『令和 4 年度版犯罪白書』）

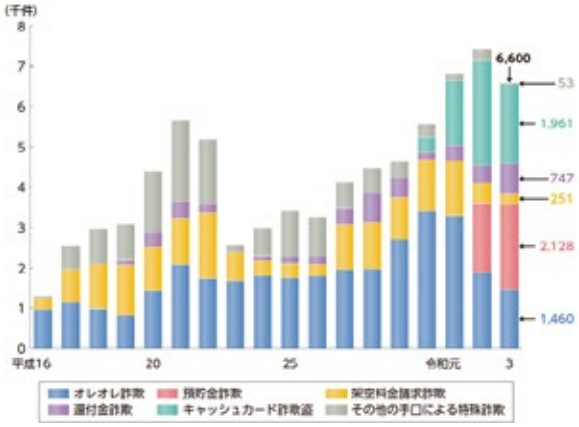


図２　特殊詐欺の検挙件数の推移
（『令和 4 年度版犯罪白書』）

他方では、防犯に関してインターネットを介した犯罪が注視されている。例えば、ネットワーク利用犯罪として、詐欺（インターネット・オークションの利用に際するなど）や脅迫をはじめ、児童買春・児童ポルノ法違反やわいせつ物頒布等があげられる。著作権法違反であれば、ルールを知らず著名人の動画や番組等をアップした行為が違反の対象となることもある。したがって、本プロジェクトでは、青少年を対象としてネット犯罪の被害に遭わないように基本的なインターネットの利用に関する知識を身に付けるとともに、加害者にもならないように青少年に対する啓発活動を実施している。

2．本年度の活動

本年度は、インターネット犯罪に対する防犯とスマートフォン利用に関する授業の実施に加えて、交通安全に係るプロジェクトを実施した。プロジェクトについては、グループワークを通じて学生から防犯や安全に関する案を集約し、グループごとにまとめて京都府北警察署に対してプレゼンテーションを行なった。このなかで、警察と連携して年度内に実施が可能な交通事案に関連する案が採用され、学生の企画として実施することができた。

(1) 地元中学校におけるインターネット犯罪に対する防犯とインターネット利用に関する授業の実施

ネット犯罪に対する防犯およびネット利用に関する授業については、その内容について事前に京都府北警察署生活安全課の課長ならびに課員の方に来校していただきアドバイスをいただいた。そのアドバイスを反映して、現状のネット犯罪と青少年のつながりについてグループワークを通じて授業を計画した。その後、授業を実施する中学校の校長ならびに学年主任の先生に授業の内容を確認してもらい、当該生徒が理解できるのか、またはどのような教授方法が効果的なのかなど、さまざまなアドバイスをいただいた。当日は、1 年生（5 クラス）を対象に授業を実施した。生徒は、本授業を通じて身近なインターネット（SNS を含む）を介する犯罪について知る機会が得られ、その予防とスマートフォン等の利用について学習できたと思われる。

(2) 京都府北警察署におけるプレゼンテーション

2022 年度は、京都府北警察署と連携して活動を実施した。学生から警察活動に連携するための案をグループワークによって集約し、各グループの代表者が京都府北警察署を訪問して、署長および当該課長へプレゼンテーションを実施した。プレゼンテーションの結果、交通事故の予防および高齢者に対する特殊詐欺の防犯活動（2023 年度実施予定）が選ばれた。

(3) 地元小学校における交通安全教室の参加

京都府北警察署におけるプレゼンテーションの結果、交通事故の予防として地元小学校における交通安全教室を介した内容を企画して実施した。今年度は、3 か所の小学校を対象に交通課と保護者の協力のもとで、交通安全教室に参加するとともにクイズを実施して、児童たちに交通安全に関する基本的な知識を得てもらった。また京都府北警察署から「自転車安全利用プロモーター」（自転車の安全な乗り方等の広報啓発活動の実施）の委嘱を受けた。委嘱式では、京都市北区長および北交通安全協会長から自転車乗車用のヘルメットを贈呈していただいた。その後、代表の学生 3 名が交通課の警察官とともに KBS 京都ラジオに出演して、自転車安全利用プロモーターに委嘱された感想や今後の交通安全について話す機会が得られた。学生にとってもよい経験となったのではないだろうか。

(4) 地元児童館における交通ルール教室の企画および運営

交通事故の抑止を目的として、交通課と連携して地元児童館において自転車の安全な乗り方等を知ってもらうための安全教室を開催した。学生が企画したクイズとともに小学校低学年向けに交通ルールに関するかるたを作成して、児童に遊びを通じて学習してもらえるように工夫した。

3．今後の展開

本プロジェクトは、防犯啓発および立ち直り支援を中心に実施してきた。今後は、交通事故や特殊詐欺等の犯罪も含めて地域住民が安心して生活できる生活環境について学生自身が調査して、グループワーク等を通じて考えをまとめ、実施できるように活動を充実させていきたい。

〈出典〉

・法務総合研究所，2022,『令和４年版犯罪白書』

②鷹峯地域活性化プロジェクト

社会連携課長　　山下　仁男

米づくりは割に合わない。

このプロジェクトで田んぼに関わる機会を得てから薄々思っていたが、ついに実感となった。報道などで見聞きする「ニッポンの農業の危機…」なんてフレーズも、こと米づくりに関しては、生業（なりわい）とするには危機ではなく、もはや成立していないと思う。

米に限らず、農業などの第一次産業は人々の日常生活に不可欠なものだが、生業となりえるかどうかは、大前提として国の政策に左右される。それらを語るには人生をやり直して学び直す必要がありそうなので、本稿では、私が生活の一部（それを「趣味」という）として体験できたことや心の動き（それを「感動」だとか「幸せ」という）、つまり、「私の趣味の幸せ」を少しばかりお伝えしたい。

〔鷹峯と本プロジェクト〕

本プロジェクトは2018年度にスタートした。鷹峯の歴史や伝統にふれながら、地域の活性化や観光資源の広報を目的とするプロジェクトである。鷹峯は豊臣秀吉が構築した御土居の跡が現存する数少ないエリアの一つ。徳川家康よりこの地を与えられた本阿弥光悦が一族とともに移住し、光悦村・芸術村を築き、尾形宗伯（尾形光琳、乾山の祖父）や茶屋四郎次郎をはじめ、多くの芸術家や工芸家が居を構えた地域でもある。京の都と各地をつなぐ京の七口の一つ長坂口は、若狭や丹波からの物資輸送路や宿場として「船のつかない港」とも称された。周辺では辛味大根やネギ、唐辛子など鷹峯を冠した野菜の生産が今も盛ん。現在は、多くの寺院や趣ある四季の移ろいを求めて多くの人々が訪れるほか、ここ数年の間に新たな開発も進み、閑静なリゾート施設なども人気を博している。

現在の社会連携センターで、キャンパス隣接エリアに特化した事業は本プロジェクトだけである。ただ、コロナ禍での停滞期間も長く、大学側スタッフの異動や地域の方々を取り巻く状況の変化などで、当初描いていたであろう展開は実現できていない。現状のおもな活動は、「紙屋川を美しくする会」の方々との紙屋川清掃と、氷室地区での農業、林業体験だが、今年度はようやくコロナ禍以前に少しだけ近づいたといえるかもしれない。まずは学生や教職員にこの地域の魅力を体感し、今につながる歴史や文化、人々の想いに触れる機会を一つでも多く提供できるよう、改めて、地域の方々と力を合わせていきたい。

〔紙屋川清掃活動〕

紫野キャンパスの西側を流れる紙屋川は天神川の上流部分を指す。平安時代、北野付近に居住する紙師が、紙屋院の管理のもとで朝廷御用の紙すきを行なっていたことがその名の由来といわれている。当時は水量も多かったようだが、現在は鷹峯山中から市中を流れる小さな河川で、南区で桂川と合流している。

「紙屋川を美しくする会」の皆さんは、自然の清流を取り戻すことを目的に、定期的な清掃活動や紙屋川沿いの植樹、紙屋川にホタルを呼び戻すための活動などを行なっている。今年度、本学からは以下の３回の清掃活動に参加し、近隣の観光施設や寺院の方々と共に清掃活動を行なった。

・2022年　6月23日（木）10：00～11：00　学生５名、職員３名
・2022年11月18日（金）10：00～11：00　学生３名、職員２名
・2023年　2月25日（土）10：00～11：00　職員１名
　※２月24日（金）雨天により順延（学生３名参加予定）

〔氷室地区での農業、林業体験〕

紫野キャンパスから、千本通、鷹峯街道、京見峠から氷室別れを北上。約 6kmのところにある集落で、田んぼの一部をお借りした稲作や、山での作業に取り組む方々のお手伝いなどを行なっている。具体的な取組みなどは年報第 8 号（2022 年 6 月発行）を参照いただくとして、今回は、学生も参加した 5 月の田植えから秋の稲刈、脱穀までを、主として 1 号田と名付けられた田んぼの移り変わりの写真で紹介する。

2022 年は活動を共にする皆さんの分担変更などもあり、田んぼ自体は前年の半分以下の 4 枚、300m^2（3 アール）弱。趣味の範疇とはいえ、数名が半年以上毎週毎週作業に勤しみ、いもちといった病気の被害もほぼ受けず、それでいて収穫は籾で 70 ～ 80kgほど。精米すればその 7 割程度。仮に 1 kg 2,000 円で販売したところで全く元が取れない。そもそも、そんな高価なお米が普通に売れるわけがない。私などは週に一度の作業程度ながら、草取りや草刈りだけでも 100 時間、最後の藁撒きまでに踏み入れた歩数は 10 万歩以上…。生産額ベースからして食が万里を越えるのは簡単なことではなく、これが冒頭のセリフにつながる。放っておけばその地にいる全ての生命が育つ環境で、稲だけを育てて効率よく米を収穫しようという前提。1 枚あたりの面積が小規模な田んぼが多い日本で、生業として一定の収入を確保するためには、生産から人々の口に入るまでの全過程おいて、数多くの工夫や努力はもちろん、高額な農機具等や科学＆化学の投入は不可欠である。

一方、無農薬の田んぼには、コナギやオモダカ、稲と見た目の区別がつきにくいヒエなどたくさんの草花が育つ。ニンゲン様が所望するお米の栄養を奪われないよう、稲以外をとにかく抜いて抜いて抜きまくる。オタマジャクシやヤゴ、ちっちゃなエビ（のようなもの）などの生き物を驚かしていると、今年はドジョウにも遭遇した。趣味だからこその無心で作業するなかで、自然の生命力を感じずにはいられない。それぞれ

2022. 5. 14　田植①

5. 14　田植②

5. 21　植え直し（浮き苗や追加）

6. 4　草取り

6. 18　草取り

7. 2　草取り

7. 9

7. 16　朝（草取り前）

7. 16　夕方（一日かけて約半分）

が何らかの役割を果たしている。言葉を語らぬ彼らの生き様は、なんと雄弁なことか！

最後に、改めて実感したことをもう一点。田んぼは完全に人工の構築物であり、土づくりや水の管理など、人間の手が 100% 入っている。その人工物に、自然界の多様な生態系が息づくことで産み出される循環の見事さ。はじめから計算され尽くしてはいないだろうが、そんな循環力を知っていた昔の人は偉かったんだなぁとつくづく思う。

そして、そんな人間の活動を受け入れる自然界の懐の深さ。世の中には、人知の及ばない領域のほうがはるかに多い。だが、そんな前人未到の領域ではなく、里山だとか田園風景に多くの人々が癒しや郷愁を感じるのは、そこに人間と自然とのつながりが感じられるからだろう。

近年、そんな里山でも生態系の変化が見られるという。いまや、鹿や猪や鳥を防ぐネットなどで防護されていない畑を見ることはなく、クマが市街地に現れる報道にも慣れてきた。様々な農作物や魚介類、家畜などの世界でも、異変と呼ばれる出来事が頻出している。

環境の変化は地球が生きている証であり、そこに生きるものは変化し続けるのが自然。だが、ヒトは自分たちの都合のバランスを優先するため、工夫や努力、科学＆化学を投入し続ける。いつかそれらが飽和状態になったとき、ヒトが安心、安全に口にできるものや栄養源は、全て工場で生産管理されたものに置き換わってしまうかもしれない。そして、そんな時代には、人々の安らぎや郷愁も、リアルな世界には存在しなくなるのかもしれない。

7. 30　夕方のおしべ

7. 23　草取り

7. 24　草なし心残りなし

7. 30　出穂（一部開花）

8. 6

9. 17　稲刈（手刈り）

9. 24　稲木干し

10. 1　脱穀

10. 8　藁切り

10. 9　藁撒き

③佛教大学 FAST 活動報告

社会学部　准教授　　山本　奈生

【佛教大学 FAST の概要】

本報告は 2022 年度、社会連携センタープロジェクト「佛教大学 FAST（Fire and Safety Team）」の活動概要を紹介するものである。佛教大学 FAST は、京都府防災消防企画課（府民生活部）の呼び掛けによって形成された「京都学生 FAST」に含まれる一団体であり、本学では当該施策最初期の 2014 年 7 月に設立された。

京都学生 FAST は 2014 年度から開始された行政および大学間連携事業であり、当初は本学を含めて 4 大学が参与するのみであったが徐々に範囲を拡大してきた。本学は他大学と比較して相対的に活動人員が多く、例えば多くの京都市内における私立大学では 5 名から 20 名以内による活動が一般的であるのに対して、本学の場合はおおむね 20 名以上から 50 名前後のメンバーによって構成されてきた(2020 年度頃まで)。一方で、2020 年度からは Covid-19 の影響があり、新入生勧誘や「社会連携」の活動に大きな制約があったため、部分的にはオンラインでの活動に切り替えつつ、現況で安全に可能な活動が何かを模索する日々の中で、活動メンバー数も減少傾向にならざるを得なかった。その上で、本年度は安全に配慮しつつ徐々に活動を再開していく年度となった。

さて筆者は 2014 年度から本プロジェクトの担当教員として継続的に参与を行なってきた。京都学生 FAST の活動は大学のおかれた地理的条件や参与学生らの問題関心に応じて様々であり、児童向けの防災教室や、地域防災の啓発、参与主体である学生自身の防災訓練、地域社会と連接した防災企画、行政機関の行なう防災行事への参加などがある。

一方で、本学の場合は一部の学生がたまたま消防士を志しているといった事例を除けば、学部学科の特色に応じた職業的志向性が、そのまま FAST の活動に反映されているとはいえない。本学の場合はむしろ、友人ネットワークや一般的な意味におけるボランティア意識が活動参与にとっての一般的動機となっている。本学におけるメンバーのリクルートは、(1) 筆者の担当する講義やゼミにおける広報、(2) 大学事務局主催の、社会連携課やボランティア室を通した広報、(3) 友人ネットワークや先輩後輩のネットワークを通じた直接的な勧誘、これらの三通りによって行なわれてきた。

【活動概要】

本学 FAST は設立当初から大学の位置する楽只学区における、楽只消防分団と連携を行なって地域防災活動に取り組んできた。ここでは北区消防団、北消防署、北区役所など複数の関連行政機関との協働が背景にある。また京都市都市計画局住宅政策課が所管するプロジェクト「3L アパートメント・プロジェクト」にて、集合住宅や伏見消防署、龍谷大学と連携しながら地域活動を行なった。これまでの大きな活動範囲は以下のようなものであり、まずは沿革を提示しておきたい。

（A−1）：消防分団との定例的な、地域防災活動、例えば火の用心への参加　（分団は「まん防」「緊急事態宣言」中は活動を行なっていないが、それ以外の時期に学生分団員が FAST とは別に、分団として活動を行なうことが可能であった）

（A−2）：消防分団と臨時で行なう、地域防災活動、例えば小学校や児童館などでの防災教室

（B）：学内で行なう、学生や教職員を対象とした防災活動、例えば AED 講習

（C）：地域社会で行なう、地元諸団体と連携した行事、例えば「船岡まつり」など
（D）：行政機関と連携して行なう防災訓練、例えば「中京区総合防災訓練」「3L アパートメント・プロジェクト」への参与
（E）：京都学生 FAST が大学間で共同して行なう行事、例えば「京防災フェスタ」など

このように、本学の場合は地元消防団に軸足を置き、そこから関係する地域諸団体や行政機関、他大学などと共に活動を実施してきた。2020・21 年度は Covid-19 の影響から学内外での活動に制約があったものの、本年度からは徐々に活動を再開することができた。

時系列順に、まず四月に新入生勧誘のブース出展を行ない、五月に学内の「防災備蓄品」の見学を行なった。本年度は新入生に限らず、二年生以上も含めて多くの新規参入者があったことは大変幸いであった。参加者の学部学科も多様であり、二条キャンパスの学生や修士課程の大学院生など、参加学生の所属学部学科に広がりがあることは、良い傾向である。

そうして活動を再開しつつある本学 FAST に NHK 京都支局の取材があり、「ニュース 630 京いちにち」のコーナーで学生の声や活動の模様が放送された。七月にはハザードマップを片手に大学近隣の散策会を行ない、夏季休暇中にも「京都府総合防災訓練」への参加や、「京都市学生消防団員意見交換会」に出席した。十月には「伏見区田中宮市営住宅　子どもふれあい祭り」にて消火器体験コーナーの運営を行なった。年が明けて一月には学内の避難訓練でも消火器体験コーナーを北消防署と共に運営し、二月には本学管財部長の協力を得て災害対応カードゲーム「クロスロード」の実施研修を行なった。また同月に「京都市市民防災センター」への参観も行なわれた。

これら以外にも、毎月の定例ミーティングや地元消防分団との「火の用心」を日常的に行なった。これら上述の活動を、難しい状況においても行なうことができたのは、FAST 参加学生・院生の主体的な学びと交流の意欲、そして社会連携課担当者、管財部長、北消防署、楽只消防分団、田中宮市営住宅や本学近隣の自治会、府市の行政関係者など直接、間接に関連する人々の支えによって可能となったものである。

【次年度の課題】

本年度は未だ終息しないコロナ禍のなかではあったが、安全面に十分留意しつつ徐々に活動を再開することができた。新規参与者にも恵まれたが、一方で、これまで活動を積極的に担ってきてくれた学生の卒業や修了も予期されるところである。担当教員としては、有意義な活動を長く続けていくためには、参加学生や教職員の特定人物にだけ負担を集中させることなく、「やってみたいことを、無理なく、愉しく」やり、皆で責任を分かち合うことをモットーとして運営補助を担ってきたつもりである。この方針はそのままに、次年度以降参加してくれる学生の主体性に期待したい。本年度の報告文は一般的な団体・活動概要などについて、過年度の報告書を参照しながら記されたものである。

④大学発進（信）プロジェクト

社会学部 講師　谷本　和也

京都市北区のコミュニティ FM 放送局である RADIO MIX KYOTO（NPO 法人コミュニティラジオ京都）様と連携してラジオ番組の企画・制作・放送を行なってきた。番組名は「ぶつ☆ラジ！」で、基本的には授業期間に 30 分番組を隔週で毎月 2 回放送することとしている。2020 年度から RADIO MIX KYOTO 様より年度毎の取組みテーマ（お題）を与えられ、それに応えた番組内容を企画して放送することになっているが、今年度（2022 年度）に提示されたお題は「人と人とのつながりを経て、魅力を発信する」というものである。

このお題に基づき、番組内容の企画構想を 4 月～8 月にかけて行なうこととなった。その内容に沿った取材･内容づくり･放送を 9 月から本格化させていくというスケジュールである。今年度のぶつ☆ラジ！では毎回の放送で MC（パーソナリティ）を 2 人 1 組で設定していて、合計 3 組が存在していた。その MC の組ごとに「人と人とのつながりを経て､魅力を発信する」をテーマに、北区・上京区の中でも特に魅力的だと感じるもの「大学生」「地域の企業」「商店街」の３つの分野に着目して学生が地域の方々を取材しラジオを通して発信していく。

大学生グループが担当するコーナー「大学生に聞こう！」では、コロナ禍によって大学生同士や大学生と地域の人の間に出来てしまった距離を、ラジオを通して身近に感じてもらうこと、現在の大学生の趣味嗜好を知ってもらい、紹介されたお店や取組みなどからリスナーが実際にそこに足を運んでもらうこと、即ち地域発展へと繋げることを目的として番組が構成された。同志社大学、立命館大学、大谷大学、京都産業大学、佛教大学の学生にインタビューを行ない、生の学生の声を意識しながら丁寧に番組作りを実施し、それぞれの大学の魅力を自らの大学である佛教大学と対比しながら発信できていた。コーナーに取り組んだ学生たちは他大学の魅力や活動を取材する中で刺激を受けながら、自らの学生生活の省察を行ない深い学びを得ていたように思う。

地域の企業グループが担当するコーナー「企業に行こう」では、北区・上京区の身近にある地域の企業の魅力を、これから就職活動を行なう大学生や地域の人に知ってもらうことを目的として番組が構成された。宮階織物、関製菓本舗、松田製本、大垣 café の各社に取材し、地域に根付き歴史や伝統を守りながらも、新たな挑戦を行なう企業の魅力を発信できていた。コーナに取り組んだ学生たちがラジオの中で｢働くことって直接相手の顔が見えずとも、誰かの幸せな暮らしを担うことに繋がる」と話していたが、まさに自分たちを含め大学生の職業観の養成にもつながる番組となっていたように思う。

商店街グループが担当するコーナー「マッチング商店街」では、自らの実体験から生まれた「これからの商店街はどうなっていくのか」という問題意識の元、商店街が元気でい続けるために商店街の皆さんがどのような取組みをされているのかを取材し発信した。また、放送を通じて、交流の場でもある商店街で、さらに商店と新たな若い世代のお客さんとのマッチングを目的として、番組が構成された。新大宮商店街、北野商店街、出町桝形商店街、大将軍商店街、北野商店街においてインタビューを行ない、商店街理事長や商店主の地域に対する思いを聞き取りそれぞれの商店街の特徴と魅力を余すことなく発信できていた。コーナーに取り組んだ学生たちは商店街と深く関わることで、商店街を利用する若者、商店街に携わる若者が増える

ことが「少子高齢化」や「後継者問題」が解決に向かっていくことにつながることに気づき、自分たちの番組がその一翼を担えるのではないかと考えるようになった。

これらが今年度の番組企画（コーナー）の概略であり、放送そのものは、2022年9月から2023年3月まで行なった。付言することとして、各コーナーを支えるミキサー（機材）担当者らの活躍を忘れることはできない。今年度にミキサーを担当したのは3名であったが、うち2名が初めてラジオのスタジオの機器を触り、ゼロからそれに習熟して生放送をこなしていたが、これらにかかる努力は並大抵のことではない。また、インタビュー音源を調整・加工したりする技術も必要である。これらの複雑な作業は、昨年度から引き続きミキサーを担当したボランティアスタッフ（3年生学生）の技術指導、将来のメンバーらが習熟しやすくするために作成いただいた緻密な作業マニュアルにより成り立つものであり、先輩にあたる学生たちの尽力とともにこれまで本プロジェクト携わっていただいた先生方のノウハウの蓄積に感謝の意を表したい。

またこれらの活動は、グローカル人材フォーラムが主催する最終報告会において審査員特別賞を受賞するという形で評価を受けた。講評の中で「インターネットや映像のようなメディアに比べて制限のあるラジオというメディアを通して地域の課題の解決を試みる取組みを評価する」趣旨のお話を頂けたことは、ラジオを通して様々な難題に果敢に挑戦した学生たちの取組みが報われたことへの喜びとともに、このような学びの場を提供することを早くから取り組み続けた先人の集う佛教大学を誇らしく感じた。

以上のように、ぶつ☆ラジ！としての活動は比較的順調に、充実した形で行なうことができたと考えている。2023年度以降も学生の放送を通じて佛教大学の魅力が広く発信され続けることが期待される。

⑤「知ってる？パラスポーツの魅力～ Do You Know the Power of Parasports? ～」活動報告について

保健医療技術学部　准教授　　白井　はる奈

1. はじめに

パラスポーツの魅力を発見し、広く伝えること、パラスポーツを通して共生社会を考えることを目的に、作業療法学科の有志学生が主となり活動を行なっている。以下、2022 年度の活動報告を行なう。

2. 活動概要

2022 年度の主な活動内容は、(1) ボッチャ交流会、(2) 車いすツインバスケットボール体験会への参加、(3) ぶつだいちびっこひろばの開催、(4) モルック体験会の開催であった。

(1) ボッチャ交流会

二条キャンパス内で、ボッチャをとおしてプロジェクトメンバーの親睦を図るとともに、ボッチャの魅力を実際にプレイしながら体感した。また、オープンキャンパスでもプロジェクトメンバーが作業療法学科志望の高校生とボッチャを行ない、交流した。

(2) 車いすツインバスケットボール体験会への参加

2021 年度に、パラアスリート講演会でご講演頂いた大向さんにご縁を繋いでいただき、車いすツインバスケットボールチームである、京都サンクロウズの練習にプロジェクトメンバーが参加させて頂いた。

(3) ぶつだいちびっこひろば

本プロジェクトメンバーと、学生企画まちづくりプロジェクト採択団体「カンパニオ」で活動する学生が中心となり、二条キャンパス近辺の乳幼児、児童親子向けのイベントを企画、運営した。ミニボッチャコーナーでは、乳幼児も簡単に気軽に楽しめるように、ボールを転がす斜面台を段ボールで手作りするなど、工夫した。当日は 80 組を超えるご家族にご参加頂き、楽しい時間をともに過ごすことができた。多様な年代の方に、パラスポーツを知って頂き、楽しんで頂くことができた。

(4) モルック体験会の開催

二条キャンパスの近くにある栂尾公園で、週に 2 回、地域の高齢者の方々が健康体操を行なっている。その方々とモルックというユニバーサルスポーツを一緒に楽しみたい、という学生からの声を受け、学生と筆者（プロジェクト支援教員）がまずは健康体操に参加し、運営しておられる方々と繋がり、「モルック体験会」を行なうこととなった。当日は学生からルールの説明を行ない、3 チームに分かれて、いい汗を流した。

3. まとめ

2020 年度、2021 年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響でなかなか思うように活動ができなかったが、今年度は感染予防対策に気をつけながら、学外の方々ともパラスポーツを通じて交流することができた。学生から積極的に活動のアイデアが出され、1 年生から 4 年生まで、学年縦断的に楽しく活動を行なうことができた。学生に、このプロジェクトの効果を尋ねると、

・パラスポーツを知ることができた。
・イベント企画、運営力、コミュニケーション力が育まれた。
・学年を越えた連携ができた。
・大学生活の楽しい思い出作りができた。

という声が聞かれた。また、地域の方々への効果として

・パラスポーツを知って頂く機会になった。
・楽しい時間を一緒に過ごすことができた。
・地域の高齢者の健康増進に役に立つことができるかも…

との声が聞かれた。今後も、パラスポーツを通じて共生社会について考え、学内の学生だけでなく、地域の方々と連携して活動を行ない、地域の方々から学び、また地域に貢献できればと思う。

⑥ SDGs 推進プロジェクト

社会連携課　宮本　泰子

日本における SDGs の認知度が高まって久しい。ニュースでは SDGs に関連する記事が頻繁に取り上げられており、本学においては、私の知る限りでも多くの学生が SDGs に取り組む企業を就職先に希望している。さらに、高校では 2022 年度から「公共」が必修になり、授業でも SDGs が取り上げられるようになったことから、若者をはじめとして認知度が急上昇しているといえる。

1.　SDGs バッジの配布数

社会連携センターでは、2019 年度から SDGs 啓発のためバッジを作成し配布している。年度ごとの配布数は表のとおりである。

	社会連携課前	学生ボランティア室前	二条キャンパス	オープンキャンパス	その他	小計	合計
2020 年度	222	35	50	未実施	90	397	2,803
2021 年度	465	76	130	263	24	958	
2022 年度	269	39	40	850	250	1,448	

2.　リーフレットの作成

前年度まではバッジに SDGs の各目標の紹介を添えることに留まっていたが、SDGs 自体がすでに広く知られているため、2022 年度からは「知ってる？ぶつだいの SDGs」と称したリーフレットを作成し、本学の SDGs の取組みを紹介した。社会連携センターのプロジェクトだけでなく、学生支援部が行なった「ＢＵランチ」や、入学部が作成している「ペットボトルから作られたバッグ」なども取り上げ、紹介している。

教育機関として SDGs に取り組むうえで重要なことは、SDGs ウォッシュ（実態が伴わないのに SDGs に取り組んでいるように見せかけること）にならないことである。SDGs の認知度が高まっているがゆえに、取組み方によっては批判の対象なりうる。しかし、言われてみれば、SDGs の本質は仏教精神に非常に似ている。「誰ひとり取り残さない」というフレーズは、まさに共生社会の実現を目指すものである。学内のあらゆる取組みに目を向けてみると、意図せずとも SDGs の目標に沿うものも多いため、引き続きこれらの取組みを学内外に発信するとともに、学生の活動を支援したい。

6. 地域福祉フィールドワーク事業

①「見守りホットライン」活動報告

社会福祉学部　教授（専門職キャリアサポートセンター長）　加美　嘉史

地域福祉フィールドワーク「見守りホットライン」の活動は、2012 年度から福祉教育開発センターの教育事業開発部門「地域福祉フィールドワーク」として行なってきたが､組織改編による福祉教育開発センター廃止にともない、2022 年度からは社会連携センターの活動に位置づけられた。そのため、ここでは 2021 年度までの「地域福祉フィールドワーク」としての活動を振り返りながら、そのうえで 2022 年度の活動報告を行ないたい。

1. これまでの「見守りホットライン」の活動

⑴「ホームレス」支援活動（2012 年～ 2019 年度）

「見守りホットライン」（旧「京都見守りの会」）では京都でホームレス・生活困窮者支援に取り組んでいる財団法人ソーシャルサービス協会ワークセンター（京都市南区）の「炊き出し」に参画し、活動を開始したが、契機となったのは 2008 年の「リーマン・ショック」であった。当時、派遣労働者ら数多くの非正規雇用労働者が仕事と住居を失い、シェルターやネットカフェ、深夜のファーストフード店などで寝泊まりするホームレス状態の人びとの姿が貧困問題として可視化された。しかし、学生にとっては身近な問題として認識することはなかなか難しく、貧困問題をリアルに捉えるための学びの場が必要と考えた。そのため大学の協力を得て、2009 年ごろから「炊き出し」に学生が参加したのが、この活動のスタートといえる。

2012 年からは「地域福祉フィールドワーク」に位置づけられたことで社会福祉学部の学生参加が大幅に増えた。活動母体となった「見守りホットライン」では、ホームレス状態にある人と「対話」すること、そこから学ぶことの大切さを確認し、毎月の「炊き出し」に参加した。対話を通して貧困状態にある人への偏見や自己責任論の問題を考えることがねらいであったが、当事者との対話をヒントに、餅つき大会、映画会、手作り年賀状の配布、そうめん大会、音楽ライブ、クリスマス会、バレンタイン企画など、毎年多くの学生企画が実現することになった。

また､「きょうと夜まわりの会」が行なっている「夜回り」活動への定期的な参加をきっかけに、ホームレス状態の方が制作した絵画等を展示する「作品展」の企画に取り組んだほか、京都の路上生活者が販売する雑誌「ビッグイシュー」とタイアップした「社会資源マップ」づくり、ホームレス生活をされた当事者の方を講師に招き、話を聞く学習会、日本最大の日雇労働者の街「釜ケ崎」へのスタディツアーなど、さまざまな活動が学生主体で行なわれた。しかし、2020 年からのコロナ禍で「炊き出し」が中止になり、2019 年度で「ホームレス」支援活動も休止となった。

⑵ 子ども食堂「まんぷく」の活動（2018 年～ 2019 年度）

学生たちの子ども・若者の貧困問題への関心の高まりを受け、2017 年度からは「若者・ホームレス支援」の枠組みにリニューアルし、活動の幅を広げることになった。「高校内居場所カフェ」に取り組む西成高校でフィールドワークを行なうなど、若者支援を視野に入れた活動の取組みを模索した。

そして 2018 年度からは大学近くの紫野学区で地域住民の皆さん（北区子ども食堂ネット）が立ち上げられた「子ども食堂」に「見守りホットライン」の学生が参画することになり、子ども食堂「まんぷく」活動がスタートすることになった。

「まんぷく」では地域の皆さんとの「対話」から学ぶことを大切にしながら活動に取り組んだ。学生メンバーは子どもたちと一緒に遊んだり、食事をしながら会話をする一方、ハロウィン、クリスマス会、音楽会、紙芝居等の学生企画に取り組み、子ども食堂を盛り上げた。

「まんぷく」は家でも、学校でもない、子どもたちの「第 3 の居場所」として、子どもたちの「ありのまま」を受け入れる居場所を目標に活動を行なってきたが、子どもだけでなく、高齢者や地域のさまざまな方も集まるようになり、多様な人の「居場所」になりつつあったが、2020 年からのコロナ禍により、「まんぷく」の活動も中止を余儀なくされた。

2. 2022 年度の活動概要 ―フードパントリー「まんぷく」の活動―

コロナ禍が長期化し、雇用環境の悪化が続くなかで「収入が減って、生活が苦しい」「子どもに満足にご飯が食べさせられない」という地域からの相談が増えている。コロナ禍で子ども食堂「まんぷく」は休止となったが、2020 年 6 月から新たに食に欠ける地域の人々に食糧を届ける「フードパントリー・まんぷく」の活動がスタートした。

コロナ禍で「見守りホットライン」の活動も大きく制約されることになったが、学生たちは SNS を活用し、地域の人々や生活に困窮している大学生などへ「フードパントリー・まんぷく」の宣伝広報活動に取り組んでいる（2023 年 1 月 25 日時点での Twitter のフォロワー 162 人、Instagram のフォロワー 129 人）。また、

毎月のフードパントリーでは食糧配布のサポートを行なうとともに、学生企画として食料を受け取りに来る子どもや地域の方に手書きメッセージ付きの折り紙を作成し、プレゼントする活動にも取り組んだ。

また、2023 年度からの子ども食堂「まんぷく」の活動再開をめざして、これまでの子ども食堂の取り組みについて学ぶ学習会を 2023 年 2 月 28 日に開催した。2022 年度の活動状況は次のとおりである。

2022 年度フードパントリーの活動状況

開催日	参加者総数（人）	うち子ども	うち学生スタッフ	学生企画
4 月 23 日 ㈯	94	31	5	「手書きメッセージ折り紙」の作成・配布
5 月 28 日 ㈯	103	33	6	
6 月 25 日 ㈯	98	33	5	
7 月 23 日 ㈯	101	33	6	「手書きメッセージ折り紙」の作成・配布
8 月 27 日 ㈯	91	33	5	
9 月 24 日 ㈯	120	45	2	
10 月 22 日 ㈯	111	39	2	
11 月 26 日 ㈯	116	49	1	
12 月 24 日 ㈯	147	64	4	「手書きメッセージ折り紙」の作成・配布
1 月 28 日 ㈯	113	40	6	
2 月 25 日 ㈯	119	39	4	
3 月 25 日 ㈯	123	39	8	

子ども食堂を
フードパントリーに

RIKURO'S

WHAT'S FOOD PANTRY?
子ども食堂は、「子どもが一人でも安心して来られる無料または低額の食堂」です。コロナ禍では、「子ども食堂」に代わって「フードパントリー」をとおして地域の生活に困窮している方々に食品・食料を届けています。
社会福祉学部の学生が中心になって活動しています！
- Information -
@京都市北区紫野東野町1-5
毎月第4土曜
Instagram
@manpuk_shokudo →
Food Pantry
子ども食堂まんぷく

②防災と福祉「学びあい」

専門職キャリアサポートセンター　実習指導講師　　後藤　至功

社会連携課への事業移管

これまで専門職キャリアサポートセンターおよび進路支援部資格課の所管により実施されてきた地域福祉フィールドワークが社会連携課に事業移管された。本移管については十分な移行期間のないままのスタートとなったため、年度当初は事業の引継ぎ、本事業の位置づけの確認、担当部署や担当教員の役割の確認等において大きな混乱をもたらすこととなった。学生や関係機関・団体においても位置づけの説明が十分に行なわれない中で従来からの取組みの継承を行なう必要があったため、その確認や説明に時間がとられることとなった。今後の反省として、地域社会を対象とした事業展開を図る取組みについては、関係機関・団体、そして主体となる学生との綿密な調整、理解のもとで行なわれるべき事項であると考える。また、事業の引継ぎについても担当部署間での協議のもとで実施すべき内容であり、今回の混乱の原因はまさにそこにあると考えている。今後ますます大学機関として、地域社会への貢献、連携・協働が重要となってくる中でこの点は猛省すべき点であることを先に触れたい。

混乱の中にありながらも本事業は「大宮へいこう！」から学生による協議の結果､「防災と福祉『学びあい』」という名称に変更となった。これまで地域福祉フィールドワークでは地域特性に応じたテーマを設定し（大宮学区：防災と福祉)、その地域に入り込んで地域福祉を学ぶことを目的としていたが、より社会貢献的な意味合い、社会福祉以外の分野を学ぶ学生の参画を意識する必要があったための変更であった。事業推進にあたり、社会連携課の調整のもと、全学部に対しての説明会が行なわれ（6/28)、約 15 名の学生の参加がみられた。

日時	内容	備考
6/28	防災と福祉「学びあい」説明会	参加学生約 15 名

(1) 活動内容

これまでの事業内容は、原則、踏襲することとなり、これまでのカテゴリーである、①京都市北区大宮学区（以下､「大宮学区」）が展開している「大宮ほっとかへんで運動」への参加協力、②防災教育の実施、③防災訓練・イベントへの参加協力、④被災地支援を柱に事業展開を図ることとなった。以下は①～④にかかる内容を報告する。

① 京都市北区大宮学区との連携・協働

-1 「大宮ほっとかへんでカレンダー」の作成協力

大宮学区では学区内における要配慮者（高齢者、障害者等）に対し、安心カードへ登録してもらうことにより、日常的な緩やかな見守り安心ネットワークの構築を目指している（大宮ほっとかへんで運動)。今年度は安心カードへの登録者を対象に防災への啓発と学区内の活動の参加促進を目的に「大宮ほっとかへんでカレンダー」を作成し、配布することとなり、その作成に本学学生が協力を行なった。具体的には本カレンダーのコンセプトの検討、内容のアイデア出し、編集作業等を学区社会福祉協議会の役員と協議を重ね、制作を行なった。

日時	内容	備考
6/8	大宮学区役員との打ち合わせ	参加学生４名、教員１名、関係者１名
6/9	学生間での打ち合わせ	参加学生８名
6/11	学生間での打ち合わせ	参加学生４名
6/22	学生間での打ち合わせ	参加学生６名
6/29	大宮学区役員との打ち合わせ	参加学生４名、教員１名、関係者１名
8/19	大宮学区役員との打ち合わせ	参加学生２名、教員１名、関係者１名
10/11	大宮学区役員との打ち合わせ	参加学生３名、教員１名、関係者２名
10～12月	カレンダーの作成、校正作業	
12/5	カレンダー完成	約 300 部、12 月中に当該者へ配布

-2　本のリサイクル市への参加協力

大宮学区では、学区内住民の交流機会として大宮文化振興会が主催となり、本のリサイクル市を実施している。学区内住民より不要となった本を回収し、奇数月の第４日曜日に廉価で配架する活動であるが、この取組みに本学学生も参加協力を行なった。

日時	内容	備考
7/24	本のリサイクル市への参加協力	参加学生５名、教員１名
9/25	本のリサイクル市への参加協力	参加学生３名、教員１名
11/27	本のリサイクル市への参加協力	参加学生２名、教員１名

-3　大宮文化祭、どんど祭り等への参加協力

大宮文化振興会主催のイベントにおいて参加協力を行なった。これらの事業はここ数年、新型コロナ禍のもと、中止、縮小を余儀なくされており、本学学生の参加も見合わせていることが多かったが、今年度は以下の事業への参加協力を行なった。

日時	内容	備考
11/5	大宮文化祭の準備手伝い	参加学生４名
11/6	大宮文化祭の手伝い	参加学生３名、教員１名
12/4	どんど祭りの準備手伝い	参加学生１名
12/25	どんど祭りの準備手伝い	参加学生１名
1/15	どんど祭りの手伝い	参加学生２名、教員１名

-4　大宮防災コア会議への出席

大宮学区では学区内の各関係機関・団体が集まり、防災について協議を行なう場（大宮防災コア会議）を偶数月に設けている（奇数月は防犯を目的とした大宮防犯コア会議を開催）。会議には本学教員がスーパーバイザーとして参画、学生は支援団体の一つとして会議に出席している。今年度は新型コロナ禍のもと、会議自体が中止、もしくは参画団体の一部自粛要請があり、学生の参加が見合されるケースが重なった。

日時	内容	備考
8/9	第２回防災コア会議	参加学生１名、教員１名
12/10	第３回防災コア会議	教員１名

② 防災教育の実施

これまで本事業では保育所から中学校、特別支援学校等の生徒に対し、防災教室を開催している。今年度については、西野山児童館にて実施、約１時間で地震を想定した学びの機会を提供した。ここ数年、新型コロナ禍のもとで、実施自体の調整が難しい状況であるが、企画を学生自身が児童館と調整し、当日の進行を務めた（参加児童は約 60 名）。

日時	内容	備考
8/19	西野山児童館・防災教室の開催	参加学生４名、教員１名

③ 防災訓練・イベントへの参加協力

新型コロナ禍により、多くの自治体において防災訓練、防災イベントが中止となっている。

日時	内容	備考
9/11	宇治市西大久保団地・防災フェスタ	参加学生２名、教員１名

(2) 事業の成果と課題

ここ数年、新型コロナ禍において、本事業の活動自粛が求められるケースが続き、活動自体、継続していくことに困難を感じている。被災地支援については、遠隔支援として募金活動等を実施してきているが、これまでの実際の被災地における体験を行なうことができず、学生のモチベーション維持という点でも課題が顕在化している。こうした中で、できることを模索しながら活動を継続しているが学生の参加率が上がらず、今後の課題として検討が必要となっている。

7. 学生ボランティア室

社会連携課　宮本　泰子

1. はじめに

学生ボランティア室は、社会連携センター内に設置された事務組織であり、社会連携課と学生スタッフが協働して運営している。主な役割は、ボランティアをしたい本学学生とボランティアを必要としている学外団体・施設を繋げる「ボランティアコーディネーション」である。また、学生スタッフ自身もボランティアを企画し、外部の団体と連携しながら本学のボランティア活動の活性化を図っている。2022 年度は、感染症の影響を受けつつも定例ミーティングを対面に戻し、一般学生に向けたボランティア相談会を再開するなど、以前の活気を取り戻しながら新たな挑戦もできた 1 年となった。

2. 洛和会ヘルスケアシステム合同企画

2020 年度より「オンラインサロン」と称し、Zoom を用いて洛和会ヘルスケアシステムのグループホーム等入居者の皆さんと交流を続けている。入居者の皆さんは、感染症の影響により外出制限やご家族との面会が制限されているため、「少しでも明るい気持ちになってもらいたい」という学生の強い思いから立案された。長引くコロナ禍で学生たちがオンラインに慣れてきたこともあり、昨年度より効果的なオンラインの活用方法についても検討し、工夫した。以下、オンラインサロン内で実施した各企画について報告する。

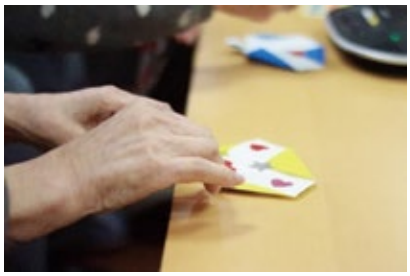
◆七夕の願いごとを書こう

この企画では、グループホーム利用者の皆さんと学生が七夕の思い出話をしながら短冊に願いごとを書いていく。学生たちは、事前に笹の絵のイラストに願い事を書いた短冊を貼り付け、グループホームの皆さんにお届けした。グループホームの皆さんは、「早く就職が決まりますように」、「近所のたこ焼き屋が繁盛しますように」などの学生の願いごとに興味津々で大いに盛り上がり、利用者の皆さんも「元気に長生き」、「1 日を大切に」など素敵な願いごとを書いてくださった。

オンラインサロンでは、参加してくださった高齢者の方々のペースや性格に合わせて学生が雰囲気を作り、時間配分も考慮しながら進行する必要がある。緊張もあり、最初は慣れない学生も、先輩の進行をまねたりしながら楽しく実施することができた様子だった。

◆貝殻とうちわをデコレーションしよう

七夕の企画を受けて、「高齢の方々には手先を動かす作業を伴う企画がよいのでは」という学生の意見があり、夏を感じられるよう「うちわ」と「貝殻」にシールで飾り付けをする企画を行なった。学生たちが折



り紙でうちわと貝殻を作成し、「皆さんの想像力と感性でオリジナルのうちわを作ってください！」と伝えたところ、控えめにシールを貼る方もいれば、派手にデコレーションをする方もいらっしゃった。最後に全員でうちわを見せ合い、それぞれのこだわったポイントなども話しながら交流した。「お若いっていいねぇ」、「また次回もよろしくお願いします」などと言いながら、画面越しに握手のしぐさを送ってくださり、学生たちも喜びと達成感を得た様子だった。

◆リズム体操「あんたがたどこさ」

洛和会ヘルスケアシステム介護事業部とのミーティングにて、椅子に座りながらの簡単な体操であればできる方が多いとのお話があったため、YouTube の高齢者向け体操動画を用いて体操をする企画を行なった。「あんたがたどこさ」の曲に合わせて、「さ」のタイミングで手を叩く、というシンプルな体操であったが、少しずつルールやスピードを変えながら数回行なった。利用者からは、「難しいけど楽しい」、「脳トレにもなる」と好評だった。

◆クリスマスツリーを飾ろう

学生がフェルトでクリスマスツリーを作成し、縫い付けたボタンにオーナメントをかけていただく企画を行なった。好きな食べ物や楽しかったクリスマスのエピソード、クリスマスケーキなどの話で盛り上がり、「元気な学生さんとオンラインで繋がれて楽しかった」と感想をいただくことができた。

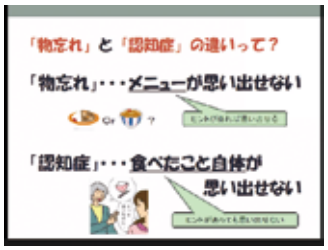
◆高齢者とのかかわり方オンライン研修

6 月 3 日、「高齢者とのかかわり方オンライン研修」を実施した。高齢者の身体的特徴や心理的特徴、交流する際の心構えなど、オンラインサロンを企画するうえで有益なお話を聞くことができた。また、洛和会ヘルスケアシステムに就職した本学社会福祉学部の卒業生も参加し、勤務されている介護サービスの紹介と、仕事のやりがいや大学生活の過ごし方などについてお話いただいた。

◆認知症サポーター養成講座

6 月 17 日、連携事業の一環として、認知症サポーター養成講座をオンラインで開催した。認知症の方の対応方法についての動画を視聴し、間違った対応をしたシーンを見てどう感じたかなどを学生が意見した。学生・教職員 40 名が参加し、「一人でも多くの人が認知症に対する正しい知識と理解を持てば、認知症高齢者等にとって優しい地域づくりに繋がると思う」、「祖父が認知症でお世話をすることがあるため大変参考になった」、「これから認知症高齢者が増えていく日本。地域全体でサポートする雰囲気ができれば良い」といっ

た感想があった。講座終了後、受講生には認知症に対する正しい知識を持つ者の証として「認知症サポーターカード」が渡された。



3. 国立病院機構宇多野病院合同企画

独立行政法人国立病院機構宇多野病院との連携事業として、宇多野病院に筋ジストロフィー等により長期入院している方々を対象とするボランティア活動を実施した。以下、各取組みを紹介する。

◆院内の壁面装飾の提供

長期入院をしている子どもたちの病室を明るくするため、学生スタッフが手作りの壁面装飾を作成した。画用紙や折り紙等を使い、いつも院内にいる方々が少しでも季節の移り変わりを感じられるよう、夏はてるてる坊主やカエル、ひまわりなどを、冬はサンタや雪だるまなどをモチーフにしたものをプレゼントした。直接病院に出向いて職員の方にプレゼントさせていただく際、院内の様子を見せていただき、タイミングが合えば、共有スペースにいる患者さんに向けてガラス越しに手を振ったり、病院のスタッフの方々が患者さんの対応をされている姿を直接目にすることができた。学生たちはその姿を見て多少なりとも衝撃を受けたようで、「自分たちにできることは何だろう」、「もっと他に支えになれることはないか」とそれぞれ思いをめぐらせた様子だった。

◆絵本の読み聞かせ・プラモデル組み立て動画 提供

絵本は「ねずみにだまされた猫」、「まあるいの」、「できるかな」を作成し、動画編集も含め約１か月かけて完成させた。「まあるいの」、「できるかな」は、スケッチブックを使ってストーリーから学生たちが考案した絵本で、飛び出すデザインを盛り込み、字幕や笑顔を大きく見せるなどの工夫により、言葉が分からない小さな子どもでも楽しめる動画となった。

プラモデルについては、組み立てを趣味としている患者さんからの「たくさんあるので作るのを手伝ってほしい」との声により実現した企画で、学生たちは美しく仕上げようと苦心しながら、そんな姿も見てもらおうと、制作工程の動画も撮影した。患者さんの中には「もう一回観たい！」と何度も動画を見てくださる方もいらっしゃった。

◆クリスマスソングの演奏動画 提供

宇多野病院内で行なわれるクリスマス会に、学生ボランティア室はクリスマスソングの動画をプレゼントすることとなった。学生スタッフ１名がギターで演奏し、それに合わせて他のスタッフが鈴などの打楽器を使いながら歌った。今回は手話を取り入れ、字幕も入れることにより様々な状況の方が楽しめるよう配慮した。

発声ができないとある患者さんからは、PC 入力で「私たちの半数以上は声を発することもままなりませんが、心の中で一緒に歌っていたと思います。学生の皆さんが私たちを思ってくださるように、私たちも皆さんを思っています。」との感想をいただいた。また、別の患者さんからは、指先で PC を操作して一点一点ペイントする点描のグリーティングカードがお礼として届き、学生スタッフたちは、「まだまだオンラインの交流が中心だが、温かみを感じられて嬉しい」と話していた。

◆クレイケーキの提供

宇多野病院では、誕生日を迎えられた患者さんにクレイケーキ（紙粘土等で作成した観賞用のケーキ）でお祝いをしている。合同ミーティングの際、病院職員の方が「宇多野病院に入院している患者さんにとって、１つ年齢を重ねることには大きな意味がある」とおっしゃったことが印象的で、本学学生ボランティア室としてもケーキをプレゼントすることとなった。クレイケーキを作ったことがないメンバーだったが、数日かけて色鮮やかなケーキを作成した。2023 年度のお誕生日のお祝いの際に利用される。

4. その他の活動

◆京都視覚障害者協会　iPhone サロン

京都視覚障害者協会が視覚障がいのある方を対象として実施した「iPhone サロン」に、学生ボランティア室のスタッフ３名と一般学生１名が運営サポートとして参加した。このサロンは、視覚障がいのある方が iPhone を効果的に使用できるよう、iPhone の読み上げ機能である「Voice Over」の使用方法を中心に、電話やメール、メモやカレンダーの使い方などをレクチャーするため開催された。参加した学生たちは、最初は使ったことのない読み上げ機能に戸惑っていたが、「普段自分がどれほど視覚情報に頼っているか、いつも使っている iPhone がいかにユニバーサルデザインとして進化しているかに気付かされました」と話していた。

◆ SDGs ワークショップ

SDGs 関連のワークショップを開催したい、という学生スタッフの希望により実現した企画。SDGs の各目標をクイズ形式で学んだのち、社会の課題解決について、「アクションカードゲームクロス」というゲームを使って楽しくアイデアを出し合った。SDGs について知っている学生がほとんどではあるものの、実践的なゲームを通じてトレードオフ（一方を得ようとすると他方を犠牲にしなければならないというジレンマの関係のこと）の解消を考える経験のない学生がほとんどだった。SDGs の各目標を再認識すると同時に、学生ボランティア室の活動が SDGs のどの目標に結び付くのかを考える機会にもなった。

◆ 4 大学ボランティア室交流会

龍谷大学、甲南大学、立命館大学、佛教大学の４大学が、今後の各大学のボランティア室の活性化のため共同で企画した。コロナ禍により、長らく他大学との繋がりが希薄になっていたなか、学生たちがボランティア活動で得た人脈を生かして企画したイベントだった。アイスブレイクの「6 マス自己紹介」で地元や好きな音楽、学んでいること等について交流を深め、「ボランティアについて」、「ボランティアコーディネーションについて」というテーマでは、各大学のスタッフが動画やプレゼンテーション資料を用いながら、それぞれの事例を共有した。「ボランティアをする意味」についてのディスカッションでは、哲学的な問いになっていくグループもあり、考えの違いを認め合ったり多角的な視点に気付く有意義な時間となった様子である。

イベント終了後、学生たちは「他大学のボランティア経験を聞いて、ボランティアに対する考え方に深みが出た」、「相談者が安心できるコーディネーションの仕方を学べた」、「対面で温かみのあるコミュニケーションがとれて有難かった」と話していた。

◆千本通りの清掃活動

千本通りのイチョウや桜の落ち葉の清掃を定期的に実施している。落ち葉の量が多いため雨の日は特に滑りやすく、点字ブロックも落ち葉に埋まっている状態だったが、千本北大路のバス停を中心に周辺をすっきりさせることができた。「ありがとう」と声をかけてくださる地域の方々もあり、地域との繋がりを大事にしつつ今後も継続して行なっていく。

◆赤い羽根共同募金

2022 年 10 月 1 日（土）、令和 4 年度共同募金運動開始式典が四条河原町で執り行なわれ、「赤い羽根共同募金運動」が全国一斉にスタートした。式典には、大藪俊志社会連携センター長が参加し、募金活動にはボランティア室の学生スタッフと一般学生の 3 名が協力した。

5. 最後に

2022 年度は学生スタッフが約 30 名に増えた。他大学も同様に増加傾向にあるようで、コロナ禍により高校で思うような活動ができなかった新入生が、「何かしたい」という思いでスタッフに加入しているようである。学生数が増えればボランティア室全体の活性化に繋がるが、一方で、ボランティアにかける熱量や考え方が多様化していくことも起こりうる。「自発性」のうえに成り立つボランティアであることを共有しながら、学生スタッフ間での違いを認め合いつつ、共に地域に貢献する学生ボランティア室の雰囲気づくりに努めたい。

また、「今後はボランティア相談会やボランティアフェスティバル（合同説明会）についても力を入れたい」、「対面のボランティアも積極的に再開したい」という学生の声もあるため、気持ちに応えられるよう環境を整えながら、学生の活躍と成長に繋がる支援をしていきたい。

8. 社会連携センター活動記録

①北区連携事業

◆北区学生×地域応援団プロジェクト会議

①開催日：2022 年 4 月 25 日（月）
　場　所：オンライン開催
②開催日：2022 年 6 月 20 日（月）
　場　所：北区社会福祉協議会
　参加者：社会福祉協議会、まちづくりアドバイザー、京都市北青年活動センター、
　　大谷大学、京都産業大学、立命館大学、佛教大学

◆北区「WA（わ）のこころ創生事業ネットワーク会議」

①開催日：2022 年 7 月 25 日（月）
　場　所：北区役所
　参加者：職員 2 名
②書面開催：2023 年 2 月

◆文化庁京都移転記念　北区「WA のこころ」創生講座－文化の WA －

第 1 回　2022 年 4 月 5 日（火）/「現代社会といけばな」
　　講師：華道家元池坊次期家元　池坊　専好　氏
第 2 回　2022 年 6 月 7 日（火）/「錦織の美の魅力」
　　講師：光峯錦織工房　錦織作家　龍村　周　氏
第 3 回　2022 年 8 月 2 日（火）/「五山送り火の歴史と民俗的意味」
　　講師：佛教大学歴史学部教授　八木　透　氏
第 4 回　2022 年 10 月 4 日（火）/「茶道について」
　　講師：茶道速水流八世家元　速水　宗燕　氏
第 5 回　2022 年 12 月 6 日（火）/「祭事の継承」
　　講師：一般財団法人賀茂県主同族会理事長　堀川　潤　氏
第 6 回　2023 年 2 月 7 日（火）/「京漆器とアサギ椀プロジェクトについて」
　　講師：西村圭功漆工房　塗師　西村　圭功　氏
進　行：能楽師　観世流　シテ方　河村　晴久　氏
場　所：妙響庵
協　力：佛教大学オープンラーニングセンター

◆京都市北区における大学・地域包括連携協定に基づく担当者会議

開催日：2022 年 9 月 15 日（木）
場　所：北区役所
参加者：職員 1 名

◆「京都市北区における大学・地域包括連携協定」の一部変更に関する覚書締結

締結日：2022 年 10 月 1 日（土）

※発効日は 2021 年 8 月 27 日に遡る

◆みんなでつくる安心安全なまち北区推進協議会　総会

開催日：2023 年 3 月 22 日（水）

場　所：書面開催

◆京都府警察北警察署との連携事業

○ライディングアカデミー（北区内 4 大学学生対象事業）

開催日：2022 年 4 月 10 日（日）

場　所：光悦自動車教習所

参加者：職員 1 名

○北警察署長訪問

※防犯啓発・立直り支援プロジェクト

開催日：2022 年 7 月 22 日（金）

場　所：北警察署

参加者：学生 6 名、教職員 2 名

○交通教室・自転車免許教室運営協力

※防犯啓発・立直り支援プロジェクト

①開催日：2022 年 10 月 18 日（火）　場所：衣笠小学校

②開催日：2022 年 11 月　2 日（水）　場所：大宮小学校

③開催日：2022 年 11 月 14 日（月）　場所：柊野小学校

④開催日：2022 年 12 月　5 日（月）　場所：楽只児童館

○中学生対象サイバー犯罪防止講演「SNS の安全利用について」

※防犯啓発・立直り支援プロジェクト

開催日：2022 年 10 月 21 日（金）

場　所：西賀茂中学校

○「犯罪被害者支援週間」に伴う広報啓発活動（北区内 4 大学合同事業）

開催日：2022 年 11 月 29 日（火）

場　所：京都市営地下鉄北大路駅南改札前

※新型コロナウイルス感染症拡大により中止

○自転車安全利用プロモーター委嘱式、京都府自転車安全利用推進員講習、KBS 京都ラジオ「妹尾和夫のパラダイス kyoto」出演

※防犯啓発・立直り支援プロジェクト

開催日：2022 年 12 月 2 日（金）

場　所：常照ホールほか

◆京都市立北総合支援学校との連携事業　　※ P19 参照

開催日：2023 年 1 月 24 日（火）

場　所：ワーク製品販売（紫野キャンパス 1 号館 1 階エントランス）、清掃活動（5-101 教室）

内　容：高等部ワークスタディ運営協力

参加者：学生 2 名

◆京都市北文化会館自主事業

○市民創造ステージ 2023 音楽会「あつまれ！ブラス」運営協力

開催日：2023 年 2 月 26 日（日）

場　所：北文化会館ホール

内　容：放送局学生による影アナウンス

②中京区連携事業

◆二条駅地域安全ネットワーク会議

○二条駅前花壇の花の植え替え

開催日：2022 年 6 月 23 日（木）

○二条駅かいわい夏祭り運営協力

開催日：2022 年 7 月 31 日（日）

場　所：BiVi 二条前

※新型コロナウイルス感染症の影響により、月 1 回の定例事務局会は中止とし、メール会議等を併用

◆二条駅かいわいまちづくり実行委員会

○シンポジウム「とらいあんぐる」冊子による『つながりから生まれるもの』

開催日：2022 年 6 月 19 日（日）

場　所：立命館大学朱雀キャンパス

○二条駅かいわい夏祭り

開催日：2022 年 7 月 31 日（日）

場　所：BiVi 二条前

○栂尾公園ふれあいまつり

開催日：2022 年 10 月 2 日（日）

場　所：栂尾公園

○人形劇と絵本ライブ

開催日：2023 年 3 月 19 日（日）

場　所：BiVi 二条前

◆中京区防災会議

開催日：2022 年 6 月 17 日（金）

場　所：書面開催

◆「世界一安心安全・おもてなしのまち京都 市民ぐるみ推進運動」中京区推進協議会

○総会

開催日：2022 年 7 月

場　所：書面開催

○中京安全安心大会

開催日：2022 年 10 月 2 日（日）

場　所：式典／本能寺境内、防犯パレード／周辺商店街

◆中京区民ふれあい事業実行委員会

開催日：2022 年 7 月

場　所：書面開催

◆二条城周辺地域活性化協議会

開催日：2022 年 12 月

場　所：書面開催

③北野商店街（京都市上京区）連携事業

◆北野夏まつり

開催日：2022 年 7 月 24 日（日）

内　容：「第 35 回北野夏まつり」への出演

ダブルダッチサークル佛跳、よさこいサークル紫踊屋

場　所：北野商店街（旧子ども文化会館前）

参加者：職員 2 名

④南丹市との連携事業

◆京都モデルフォレスト（森林保全）運動　　※ P11 参照

① 2022 年 9 月 10 日（土）

活動内容：森林散策（水路の利用についての学習）・丸太を使った敷物・置き台作り

参 加 者：学生 19 名、教職員関係者 18 名、連携機関 10 名

② 2022 年 11 月 19 日（土）

活動内容：丸太階段改修、宮脇地区の道相神社落ち葉清掃

参 加 者：学生 5 名、教職員 8 名、連携機関 5 名

③ 2022 年 3 月 4 日（土）

※大雪の影響により中止

⑤社会連携センタープロジェクト

◆防犯啓発・立ち直り支援プロジェクト　※ P25 参照

○サイバー犯罪防止「SNS の安全利用について」

開催日：2022 年 10 月 21 日（金）
場　所：西賀茂中学校
参加者：学生 12 名、教職員 2 名

○自転車安全利用プロモーター委嘱式、京都府自転車安全利用推進員講習、KBS 京都ラジオ「妹尾和夫のパラダイス kyoto」ラジオカーレポートに生出演

開催日：2022 年 12 月 2 日（金）
場　所：常照ホールほか

○自転車教室

2022 年 10 月 18 日（火）衣笠小学校	参加者：学生 5 名、教員 1 名
2022 年 11 月　2 日（水）大宮小学校	参加者：学生 5 名、教員 1 名
2022 年 11 月 14 日（月）柊野小学校	参加者：学生 5 名、教員 1 名
2022 年 12 月　5 日（月）楽只児童館	参加者：学生 9 名、職員 1 名

◆鷹峯地域活性化プロジェクト　※ P28 参照

＜清掃活動（紙屋川）＞

・2022 年　6 月 23 日（木）	参加者：学生 5 名、職員 3 名
・2022 年 11 月 18 日（金）	参加者：学生 3 名、職員 2 名
・2023 年　2 月 25 日（土）	参加者：職員 1 名

※ 2 月 24 日（金）雨天により順延（学生 3 名参加予定）

＜農業体験（氷室）＞

・2022 年　5 月 14 日（土）田植え	参加者：学生 7 名、教職員 3 名
・2022 年　5 月 21 日（土）さし苗	参加者：職員 1 名
・2022 年　6 月　4 日（土）草取り、草刈り、田んぼ整備	参加者：職員 1 名
・2022 年　6 月 18 日（土）　〃	参加者：職員 1 名
・2022 年　6 月 19 日（日）　〃	参加者：職員 1 名
・2022 年　7 月　2 日（土）　〃	参加者：職員 1 名
・2022 年　7 月　9 日（土）　〃	参加者：職員 1 名
・2022 年　7 月 16 日（土）　〃	参加者：職員 1 名
・2022 年　7 月 23 日（土）　〃	参加者：職員 1 名
・2022 年　7 月 24 日（日）　〃	参加者：職員 1 名
・2022 年　7 月 30 日（土）　〃	参加者：職員 1 名
・2022 年　8 月　6 日（土）　〃	参加者：職員 1 名
・2022 年　8 月 11 日（祝・木）　〃	参加者：職員 1 名
・2022 年　9 月　3 日（土）　〃	参加者：職員 1 名

・2022 年　9 月 17 日（土）稲刈り　参加者：学生 3 名、職員 3 名
・2022 年　9 月 20 日（火）台風後の見回り、稲木修繕　参加者：職員 2 名
・2022 年　9 月 24 日（土）稲の確認、山仕事　参加者：職員 1 名
・2022 年 10 月　1 日（土）脱穀、ご近所のお手伝い　参加者：職員 2 名
・2022 年 10 月　8 日（土）藁切り、藁撒き　参加者：職員 1 名
・2022 年 10 月　9 日（日）藁撒き　参加者：職員 1 名

◆学生消防防災サークル「佛教大学 FAST」　※ P31 参照

○京都市無火災推進日（毎月 5 日、20 日）に楽只消防分団の防火防犯パトロール（火の用心）への参加

○ミーティング

毎月 20 日前後で実施（オンラインと対面の併用開催）

○紫野キャンパス備蓄品見学

開催日：2022 年 5 月 20 日（金）
場　所：1 号館地下 1 階
参加者：学生 16 名

○ FAST ハザードマップツアー

開催日：2022 年 7 月 5 日（火）
場　所：紫野キャンパス周辺
参加者：学生 5 名、教員 1 名

○田中宮ふれあいまつり 消火器体験コーナーサポート

開催日：2022 年 10 月 22 日（土）
場　所：田中宮市営住宅（京都市伏見区）
参加者：学生 9 名、教職員 3 名

○災害救助用備品体験会

開催日：2022 年 11 月 14 日（月）
場　所：第 3 会議室
参加者：学生 8 名、職員 1 名

○学内防災訓練 消火器体験コーナーサポート

開催日：2023 年 1 月 24 日（火）
場　所：紫野キャンパス内
参加者：学生 8 名、教職員 2 名

○避難所運営ゲームクロスロード体験会

開催日：2023 年 1 月 27 日（金）
場　所：第 3 会議室
参加者：学生 7 名、教職員 2 名

○京都市市民防災センター見学

開催日：2023 年 2 月 15 日（水）
場　所：京都市市民防災センター（京都市南区）
参加者：学生 11 名、職員 1 名

○令和４年度京都市北消防署市民消防表彰式

※消防局長表彰

開催日：2023 年 3 月 10 日（金）

場　所：京都市北消防署

参加者：学生 2 名、教員 1 名

◆大学発進（信）プロジェクト　※ P33 参照

○コミュニティラジオ（ぶつ☆ラジ！）

第 1 回　2022 年 9 月 16 日（金）「大学生魅力発信チーム」による放送
第 2 回　2022 年 9 月 30 日（金）「商店街グループ」による放送
第 3 回　2022 年 10 月 14 日（金）「地域の企業グループ」による放送
第 4 回　2022 年 10 月 28 日（金）「大学生魅力発信チーム」による放送
第 5 回　2022 年 11 月 11 日（金）「商店街グループ」による放送
第 6 回　2022 年 11 月 25 日（金）「地域の企業グループ」による放送
第 7 回　2022 年 12 月 9 日（金）「大学生魅力発信チーム」による放送
第 8 回　2022 年 12 月 23 日（金）「商店街グループ」による放送
第 9 回　2023 年 1 月 20 日（金）「地域の企業グループ」による放送
第 10 回　2023 年 2 月 3 日（金）「大学生魅力発信チーム」による放送
第 11 回　2023 年 2 月 17 日（金）「商店街グループ」による放送
第 12 回　2023 年 3 月 3 日（金）「地域の企業グループ」による放送
第 13 回　2023 年 3 月 17 日（金）「大学生魅力発信チーム」による放送
第 14 回　2023 年 3 月 31 日（金）「商店街グループ」による放送

◆知ってる？パラスポーツの魅力～ Do You Know the Power of Parasports? ～　※ P35 参照

○ボッチャ交流会・分析会

①開催日：2022 年 8 月 5 日（金）
場　所：N1-515 教室
参加者：5 名

②開催日：2022 年 8 月 9 日（火）
場　所：N1-515 教室
参加者：12 名

○モルック交流会・分析会

①開催日：2022 年 9 月 12 日（月）
場　所：栂尾公園（京都市中京区）
参加者：5 名

②開催日：2022 年 9 月 13 日（火）
場　所：栂尾公園（京都市中京区）
参加者：6 名

○ツインバスケ体験会

開催日：2022 年 10 月 22 日（土）

場　所：京都市障害者教養文化・体育会館（京都市南区）

参加者：13 名

○第８回浄土宗宗門関係大学社会連携企画報告会での発表

開催日：2022 年 12 月 17 日（土）
場　所：京都華頂大学・華頂短期大学　6 号館華頂ホール
内　容：活動報告および、パネルディスカッションへの登壇
参加者：学生 2 名

◆ SDGs（持続可能な開発目標）推進プロジェクト　　※ P37 参照

○オリジナルバッジおよびリーフレットの製作・自由配布

※リーフレットは 2022 年度よりバッジと共に配布
2020 年度　397 個　（社会連携課前、二条キャンパス、学生ボランティア室、図書館）
2021 年度　958 個　（社会連携課前、二条キャンパス、学生ボランティア室、オープンキャンパス）
2022 年度　1,448 個（社会連携課前、二条キャンパス、学生ボランティア室、オープンキャンパス）

⑥地域福祉フィールドワーク事業

◆見守りホットライン　　※ P38 参照

○フードパントリー

主催者：北区子ども食堂ネット
場　所：京都高齢者生活協同組合くらしコープ
内　容：コロナ禍で中止となっている子ども食堂を
① 2022 年　4 月 23 日（土）　参加者：学生 5 名「手書きメッセージ折り紙」の作成・配布
② 2022 年　5 月 28 日（土）　参加者：学生 6 名
③ 2022 年　6 月 25 日（土）　参加者：学生 5 名
④ 2022 年　7 月 23 日（土）　参加者：学生 6 名「手書きメッセージ折り紙」の作成・配布
⑤ 2022 年　8 月 27 日（土）　参加者：学生 5 名
⑥ 2022 年　9 月 24 日（土）　参加者：学生 2 名
⑦ 2022 年 10 月 22 日（土）　参加者：学生 2 名
⑧ 2022 年 11 月 26 日（土）　参加者：学生 1 名
⑨ 2022 年 12 月 24 日（土）　参加者：学生 4 名「手書きメッセージ折り紙」の作成・配布
⑩ 2023 年　1 月 28 日（土）　参加者：学生 6 名
⑪ 2023 年　2 月 25 日（土）　参加者：学生 4 名
⑫ 2023 年　3 月 25 日（土）　参加者：学生 8 名

○学生企画「手書きメッセージ折り紙」作成

場　所：1-309 教室
内　容：フードパントリーで配付するメッセージ折り紙を作成しながら地域の貧困を考える機会とする。併せて見守りホットラインの活動紹介も行なう。
① 2022 年 12 月 15 日（木）　参加者：団体学生スタッフ 10 名、一般学生 5 名
② 2022 年 12 月 20 日（火）　参加者：団体学生スタッフ 9 名、一般学生 6 名

◆防災と福祉「学びあい」　　※ P42 参照

○団体説明会

開催日：2022 年 6 月 28 日（火）

参加者：学生約 15 名

○「大宮ほっとかへんでカレンダー」の作成協力

「大宮ほっとかへんで運動」における安心カードへの登録者を対象に、防災啓発と活動への参加促進を目的に「大宮ほっとかへんでカレンダー」を作成。

○本のリサイクル市への参加協力

① 2022 年　7 月 24 日（日）　参加者：学生 5 名、教員 1 名

② 2022 年　9 月 25 日（日）　参加者：学生 3 名、教員 1 名

③ 2022 年 11 月 27 日（日）　参加者：学生 3 名、教員 1 名

○大宮文化祭、どんど祭り等への参加協力

①大宮文化祭　2022 年 11 月　6 日（日）　参加者：学生 3 名、教員 1 名

②どんど祭り　2023 年　1 月 15 日（日）　参加者：学生 2 名、教員 1 名

○防災教室の実施

開催日：2022 年 8 月 19 日（金）

場　所：西野山児童館

参加者：学生 4 名、教員 1 名

○宇治市西大久保団地・防災フェスタ

開催日：2022 年 9 月 11 日（日）

場　所：宇治市西大久保団地

参加者：学生 2 名、教員 1 名

⑦学生企画まちづくりプロジェクト

募集期間：2022 年 4 月 28 日（木）～ 5 月 20 日（金）

支援対象期間：2022 年 4 月 1 日（金）～ 2023 年 1 月 22 日（日）

採択件数：6 件

No.	プロジェクト名	対象地域	学生数	支援教員	所属学部	支援金額
1	寝屋川スポーツ発展プロジェクト	大阪府寝屋川市	10	大束　貢生	社会	23,340 円
2	清酒による伏見区活性化プロジェクト	京都市伏見区	5	大谷　栄一	社会	41,640 円
3	京都の伝統農産物を盛り上げるための地域活性化プロジェクト	宇治市	6	大谷　栄一	社会	39,060 円
4	「香り」を利用したまちづくり	京都市中京区	5	大谷　栄一	社会	40,060 円
5	わくわく研究室	京都市北区	14	平田　豊誠	教育	49,577 円
6	人をつなぐ架け橋プロジェクト ～住みやすい地域を目指して～	京都市中京区	3	白井はる奈	保健医療技術	13,085 円

⑧学生ボランティア室　　※ P45 参照

1.　概要

○主な事業

ボランティアコーディネート、ボランティア企画の立案、ボランティア情報の発信

・ボランティア登録団体数（2022 年度）61 団体

・ボランティア情報受付数（2022 年度）195 件

・学生スタッフ数　32 名（4 年生 1 名、3 年生 5 名、2 年生 12 名、1 年生 14 名）※ 2023 年 2 月時点

・機関誌　『Maitri』Vol.61　2022 年 4 月 1 日発行　2,500 部

2.　活動記録

◆紫櫻祭（新入生歓迎祭における勧誘活動）

開催日：2022 年 4 月 12 日（火）

場　所：佛教大学紫野キャンパス

内　容：ブース参加（来場者約 15 名）

◆新入生ボランティア体験会

① 2022 年 4 月 13 日（水）　参加者：学生スタッフ 6 名、一般学生 2 名

② 2022 年 4 月 15 日（金）　参加者：学生スタッフ 6 名、一般学生 5 名

③ 2022 年 4 月 19 日（火）　参加者：学生スタッフ 15 名、一般学生 1 名

④ 2022 年 4 月 20 日（水）　参加者：学生スタッフ 11 名、一般学生 4 名

⑤ 2022 年 4 月 21 日（木）　参加者：学生スタッフ 3 名、一般学生 1 名

場　所：学生ボランティア室

内　容：学生スタッフと希望者がボランティア企画のミーティングを体験する

◆キャンパス周辺清掃活動

① 2022 年　4 月 13 日（水）　参加者：学生 7 名、職員 2 名

② 2022 年　4 月 28 日（木）　参加者：学生 11 名、職員 3 名

③ 2022 年 10 月　5 日（水）　参加者：学生 5 名、職員 2 名

④ 2022 年 10 月 28 日（金）　参加者：学生 4 名、職員 2 名

⑤ 2022 年 12 月 16 日（金）　参加者：学生 6 名、職員 2 名

場　所：紫野キャンパス正門前から千本北大路バス停周辺

◆ゼミによる学生ボランティア室見学

開催日：2022 年 4 月 20 日（水）

内　容：山本耕平先生の入門ゼミ生への学生ボランティア室活動紹介

参加者：約 20 名

◆「ウクライナ人道支援募金」関連　　※ P6 「特集」参照

総募金額 483,489 円を日本赤十字社京都支部に寄付。

◆ SDGs ワークショップ

開催日：2022 年 7 月 8 日（金）
場　所：1-415 教室
内　容：SDGs についてクイズ形式で学び、カードゲームで社会の課題解決を考える。
　　また、ボランティア室の企画がどの目標にあてはまるか考える
参加者：学生スタッフ 16 名

◆ボランティア相談会

開催日：2022 年 7 月 15 日（金）
場　所：学生ボランティア室
内　容：学生スタッフが一般学生のボランティアに関する相談に対応
参加者：学生スタッフ 10 名、一般学生 10 名

2. 学外団体合同企画

◆洛和会ヘルスケアシステム合同企画

⑴合同ミーティング（オンライン）

①開催日：2022 年 4 月 27 日（水）
内　容：今年度の企画について（折り紙、手遊び、タイムスリップオンライン京都ツアー、オンラインオセロなど）
参加者：学生 7 名、職員 2 名

②開催日：2022 年 6 月 3 日（金）
内　容：今後の企画について（七夕の願い事、体操、オセロ）
参加者：学生 8 名、職員 2 名

③開催日：2022 年 11 月 14 日（月）
内　容：今後の企画について（リズム体操、クリスマスツリーの飾り付け）
参加者：学生 2 名、職員 2 名

⑵オンラインサロン

①七夕の願いごとを書こう
開催日：2022 年 6 月 22 日（水）
場　所：学生ボランティア室、洛和グループホーム
内　容：七夕の願いごとを短冊に書き、笹の葉の絵に貼り付ける
参加者：1 回目（学生スタッフ 2 名、利用者 5 名）／ 2 回目（学生スタッフ 2 名、利用者 3 名）

②うちわをデコレーションしよう
開催日：2022 年 6 月 27 日（月）
場　所：学生ボランティア室、洛和グループホーム
内　容：学生が折り紙で作ったうちわにシールを貼り付ける
参加者：学生スタッフ 3 名、利用者 3 名

③貝殻をデコレーションしよう
開催日：2022 年 6 月 27 日（月）
場　所：学生ボランティア室、洛和グループホーム
内　容：学生が折り紙で作った貝殻にシールを貼り付ける
参加者：学生スタッフ 3 名、利用者 3 名

④リズム体操
開催日：2022 年 11 月 25 日（金）
場　所：学生ボランティア室、洛和グループホーム
内　容：「あんたがたどこさ」の曲に合わせて足踏みや手拍子をする
参加者：学生スタッフ２名、利用者９名
※ 10 月 27 日（木）も開催予定だったが、新型コロナウイルス罹患者が出たため中止

⑤クリスマスツリーの飾り付け
開催日：2022 年 12 月 13 日（火）
場　所：学生ボランティア室、洛和グループホーム
内　容：学生スタッフが作ったクリスマスツリーの台紙に飾りをつける
参加者：学生スタッフ４名、利用者３名

⑶グループホーム訪問
①開催日：2022 年 6 月 20 日（月）
場　所：洛和グループホーム壬生
内　容：オンラインサロン（七夕企画）制作物の提供
参加者：学生スタッフ３名、職員２名

②開催日：2022 年 7 月 20 日（水）
場　所：洛和グループホーム壬生
内　容：七夕企画の制作物のお渡し、動画撮影
参加者：学生スタッフ２名、職員２名

⑷研修・講座等
①洛和会ヘルスケアシステムによるオンライン研修
開催日：2022 年 6 月 3 日（金）
場　所：学生ボランティア室（オンライン）
内　容：高齢者との話し方や心構え等について座談会形式で実施
参加者：学生スタッフ８名、職員２名

②認知症サポーター養成講座　※一般学生、教職員対象
開催日：2022 年 6 月 17 日（金）
場　所：オンライン
内　容：認知症の症状やその予防、認知症の方に接する際の心構えを学ぶ。受講生には、認知症に対する正しい知識と理解を持つ者の証として、認知症サポーターカードが配付される。
参加者：学生 32 名、教職員８名

◆独立行政法人国立病院機構 宇多野病院

⑴合同ミーティング（オンライン）
①開催日：2022 年 4 月 27 日（水）
内　容：今年度の企画について（院内の飾り制作、プラモデル作成および動画提供、絵本の読み聞かせ動画作成など）
参加者：学生４名、職員２名

②開催日：2022 年 10 月 27 日（木）
内　容：今年度の企画について（院内の飾り制作、クレイケーキ制作など）
参加者：学生２名、職員２名

⑵制作物提供および病院訪問

①開催日：2022 年 6 月 9 日（木）
内　容：院内の飾り付け提供、院内見学
参加者：学生スタッフ 2 名、職員 2 名

②開催日：2022 年 8 月 3 日（水）
内　容：プラモデルおよび院内の飾り付け提供、院内見学
参加者：学生スタッフ 2 名、職員 2 名

③開催日：2022 年 12 月 2 日（金）
内　容：クレイケーキおよび院内の飾り付け提供、院内見学
参加者：学生スタッフ 2 名、職員 1 名

◆ライトハウス iPhone サロン

京都ライトハウスが行なう視覚障がいがある方への iPhone 使用法講習会への協力

①開催日：2022 年 9 月 19 日（祝・月）
場　所：京都ライトハウス（京都市北区）
参加者：学生スタッフ 7 名
※事前研修を 8 月 21 日（日）・8 月 29 日（月）に実施
※台風の影響により中止

②開催日：2023 年 2 月 23 日（祝・木）
場　所：京都ライトハウス
参加者：学生スタッフ 3 名、一般学生 1 名、サロン参加者 31 名

◆他大学ボランティア室との交流会

本学はじめ複数の大学でボランティアに取り組む学生たちが交流を行なう

①スタッフ顔合わせ
開催日：2022 年 9 月 6 日（火）
場　所：学生ボランティア室
参加者：龍谷大学 3 名、甲南大学 1 名、本学 6 名

②交流会
開催日：2022 年 11 月 27 日（日）
場　所：1-415 教室
参加者：龍谷大学 9 名、甲南大学 7 名、立命館大学 1 名、本学 8 名

◆「赤い羽根共同募金」街頭募金

社会福祉法人京都府共同募金会が主催する街頭募金事業への協力

開催日：2022 年 10 月 1 日（土）式典、街頭募金
2022 年 10 月 2 日（日）街頭募金
場　所：四条河原町交差点（京都市下京区）
参加者：10 月 1 日　式典／大藪俊志社会連携センター長、街頭募金／学生スタッフ 1 名
10 月 2 日　街頭募金／学生スタッフ 2 名、一般学生 1 名

⑨佛教大学ボランティア支援金制度

募集期間：2022 年 4 月 28 日（木）～ 11 月 18 日（金）
支援対象期間：2022 年 4 月 1 日（金）～ 2023 年 1 月 22 日（日）
採択件数：0 件

⑩受託事業・受託研究　　※ P10 参照

No.	区分	事業名称	事業期間	担当教員
1	中京区委託事業	京都市中京区 「二条駅地域安全ネットワーク事業」に係る講師及び企画・運営委託	2022 年 4 月 1 日～ 2023 年 3 月 31 日	山本　奈生 白井はる奈

⑪その他の活動

◆第 8 回浄土宗宗門関係大学社会連携企画報告会　　※ P14 参照

開催日：2022 年 12 月 17 日（土）
場　所：京都華頂大学・華頂短期大学　6 号館華頂ホール
内　容：浄土宗、京都華頂大学・華頂短期大学、京都文教大学・京都文教短期大学、
　　東海学園大学、佛教大学による共同開催事業
参加者：学生 2 名、職員 2 名

◆ラグスタ株式会社との連携事業

スマートフォン専用アプリ「KYOTO カロリーマップ」（2023 年 4 月リリース）の開発に、本学学生 15 名が協力。アプリ内企画の立案を行ない、実装させている。

◆みやこ子ども土曜塾

土・日祝日や夏休み等の学校休業日において、子どもたちの豊かな学びと育ちの場を市民ぐるみで創造し、提供する事業を京都市が促進している。本学からは、よさこいサークル「紫踊屋」の学生たちによる「よっちょれ」での地域貢献事業を行なっている。
※新型コロナウイルス感染症の影響により中止。

◆京都市福祉ボランティアセンター運営委員会

任期：2021 年 6 月 30 日から 2023 年 6 月開催 提示評議員会終結時まで
氏名：社会学部准教授　大藪俊志（社会連携センター長）

◆京都新聞社会福祉事業団「京都新聞愛の奨学金」選考委員

選考委員長：社会学部准教授　大藪俊志（社会連携センター長）

◆ 3L APARTMENT プロジェクト＠田中宮 運営協議会 ※オブザーバー参加

○第 1 回（書面開催）
会議開催：2022 年 6 月
○第 2 回（オンライン参加）
開催日：2023 年 2 月 17 日（金）
参加者：教職員 2 名

◆刊行物

『社会連携センタープロジェクトパンフレット』	2022 年 4 月	2,500 部
『Maitrī　Vol.61』	2022 年 4 月	2,500 部
『佛教大学社会連携センター年報　第 8 号』	2022 年 6 月	200 部
『SDGs 推進プロジェクトリーフレット』	2022 年 6 月	3,000 部

⑫活動中止・延期措置等の記録

2022 年度も新型コロナウイルス感染症の影響による事業の開催中止やオンライン代替実施等が数多く発生した。それらについて、本年報では個別の記載を行なわないこととする。各事業における対応や工夫などは、それぞれの記録を参照いただきたい。

⑬ホームページ掲載記録

≪研究・社会連携≫ 2022 年度お知らせ一覧（日付はホームページ掲出日）

2022.4.13　北区内 4 大学生対象「ライディングアカデミー」が開催されました
2022.5.10　ウクライナへの人道支援募金活動を実施します
2022.5.17　鷹峯地域活性化プロジェクト　氷室で田植えを実施しました！
2022.6.7　待鳳学区「すこやか学級」に参加しました（仏教学部）
2022.6.17　学生ボランティア室が宇多野病院に院内の飾り付けを提供
2022.6.22「佛教大学ウクライナ人道支援募金活動」実施報告
2022.6.23　鷹峯地域活性化プロジェクト　紙屋川の清掃活動を実施しました！
2022.8.1　待鳳学区「すこやか学級」に参加しました（仏教学部）
2022.8.1　「防犯啓発・立直り支援プロジェクト」実施報告（7 月）
2022.8.1　きたの夏まつりへ本学学生が出演
2022.8.5　学生ボランティア室が宇多野病院に絵本の読み聞かせ動画等を提供
2022.8.9　【モデルフォレスト運動】活動紹介
2022.8.10　社会連携センタープロジェクト「知ってる？パラスポーツの魅力」がボッチャ体験会を実施
2022.8.31　大宮西野山児童館（京都市北区）で防災講座を開催
2022.9.14　美山町にてモデルフォレスト運動（森林保全活動）を実施
2022.9.21　鷹峯地域活性化プロジェクト　氷室で稲刈を実施しました！
2022.10.4　鷹峯地域活性化プロジェクト　氷室で収穫した稲を脱穀しました！
2022.10.7　11 月 6 日（日）、二条キャンパスで「ぶつだいちびっこひろば」を開催！
2022.10.24「防犯啓発・立直り支援プロジェクト」西賀茂中学校でサイバー犯罪防止啓発活動を実施しました！
2022.10.25「赤い羽根共同募金運動」へ参加しました
2022.10.31 パラスポーツ（ツインバスケ）の体験を行いました
2022.11.2　佛教大学 FAST が田中宮ふれあいまつりに参加しました！
2022.11.16 二条キャンパスで「ぶつだいちびっこひろば」を開催しました
2022.11.18 鷹峯地域活性化プロジェクト　紙屋川の清掃活動を実施しました！
2022.11.22 美山町にて今年度第 2 回目のモデルフォレスト運動（森林保全活動）を実施
2022.12.2　社会学部 3 年生が京都府北警察署から「自転車安全利用プロモーター」の委嘱を受けました

2022.12.2 【地域の安心・安全のために】佛教大学生が「自転車安全利用プロモーター」として近隣の小学生に交通安全教室を実施
2022.12.6 【防犯啓発・立ち直り支援プロジェクト】京都市の小学校３校で自転車教室を実施！
2022.12.6 【防犯啓発・立ち直り支援プロジェクト】本学学生が「自転車安全利用プロモーター」として小学生に交通安全教室を実施！
2022.12.6 学生ボランティア室４大学交流会を実施しました！
2022.12.13 洛和会ヘルスケアシステム合同企画のオンラインサロンを開催
2023.2.8 京都市立北総合支援学校との連携事業を行いました！
2023.2.22 トルコ・シリア地震への支援情報について
2023.2.22 2022 年度第３回モデルフォレスト運動の中止について
2023.3.10 学生消防防災サークル佛教大学 FAST が表彰されました！
2023.3.20 本学学生３名に独立行政法人国立青少年教育振興機構より法人ボランティア表彰が授与されました！

9. 資料　社会連携センター組織、規程

①佛教大学社会連携センター規程

平成 24 年 4 月 1 日
改正　平成 25 年 4 月 1 日

第 1 条　佛教大学学則第 62 条に定める規定により，佛教大学社会連携センター（以下「センター」という。）を置く。

第 2 条　本規程において「社会連携」とは，建学の精神である仏教精神に基き，＜他者との共生＞＜内なる自己の発見＞＜人間力の涵養＞という理念･目的を具現化するために，多様な社会と連携することをいう。
2　本規程において「ボランティア」とは，学生が自発的に行なう非営利の社会的貢献活動をいう。

第 3 条　センターは，学生および教職員等による社会貢献事業等の推進ならびに展開を行なうとともに，それらを通して学則第 1 条に定める人材の育成を行なうことを目的とする。

第 4 条　センターは，その目的を達成するため，次の事業を行なう。
(1)　社会連携に係わる調査研究に関すること。
(2)　研究支援，技術交流および学術研究の戦略的推進に関すること。
(3)　地域交流に関すること。
(4)　知的資源の広報に関すること。
(5)　学内外のボランティア活動に関する情報収集をするとともに，それらの情報活動の提供に関すること。
(6)　学生等に対するボランティア活動への参加機会の紹介をするとともに，学生等への助言と支援に関すること。
(7)　その他，社会連携事業に関すること。

第 5 条　センターの事業および運営に関する事項は，研究推進機構会議（以下「機構会議」という。）において審議する。

第 6 条　センターの実務および運営に関する事項を協議するために，社会連携センター運営会議（以下「運営会議」という。）を設ける。これに関する規程は，別に定める。

第 7 条　センターの事業を行なうために，センター長を置く。
2　センターの事業を円滑に進めるために，センターに社会連携（コミュニティキャンパスを含む）部門およびボランティア部門を置くことができる。
3　前項を運用するために，必要に応じて次のものを置くことができる。

(1)　社会連携コーディネーター
(2)　ボランティアコーディネーター
(3)　研究員ならびに研究補助員
4　センターの運営に学生の協力を求めることができる。

第８条　センター長は，学長が任命する。なお，任期は１年とし，再任を妨げない。
2　センター長は，センターの事業を統括し，その事業の適正な運営に当たる。

第９条　第７条第３項第１号および第２号に定める者は，社会連携ならびにボランティア活動に経験と識見を有する者とする。但し，採用についての規程は別に定める。
2　第７条第３項第３号に定める者は，社会連携に係わる調査・研究および調査・研究の補助を行なう経験と識見を有する者とする。但し，採用については別に定める。
3　第７条第３項に定める者は，センター長のもとで，第４条各号に定める事業を行なう。

第10条　センターに関する事務は，研究推進部社会連携課がこれにあたる。

第11条　本規程の改廃は，研究推進機構会議の議を経て，大学評議会の承認を得なければならない。

附　則
第１条　本規程は，平成24年４月１日から施行する。
第２条　本規程の施行により,「ボランティア室規程」(平成14年４月１日施行),「佛教大学コミュニティキャンパス室規程」（平成16年４月１日）は廃止する。
第３条　本規程は，平成25年４月１日から改正施行する。

②社会連携センター運営会議規程

平成24年４月１日
改正　平成30年４月１日
改正　平成30年７月１日

第１条　本規程は，社会連携センター運営会議（以下「運営会議」という。）の構成および運営について必要な事項を定める。

第２条　運営会議は，社会連携センター長，センター長の推薦に基き研究推進機構長が指名する教員若干名，社会連携課長をもって構成する。
2　運営会議は，必要に応じて前項に掲げる構成員以外の者を出席させ，報告および説明または意見を求めることができる。
3　運営会議は，研究推進部の所管とする。

第３条　運営会議に，議長と副議長を置く。
2　議長はセンター長が務め，副議長は運営会議構成員の互選によって選出する。

第４条　センター長は，運営会議を招集し，会務を統轄する。

第５条　運営会議に関する事務取扱は，研究推進部社会連携課がこれにあたり，協議事項等にかかわる資料作成および議事録等，運営会議に関する事務を処理する。

第６条　運営会議は，次の事項を協議し，その議案を研究推進機構会議に提出する。
(1)　産学官公ならびに地域等との連携・交流に関する事項
(2)　前号の教育研究活動の支援・推進に関する事項
(3)　コミュニティキャンパスに関する事項
(4)　学生ならびに教職員のボランティアに関する事項
(5)　社会連携センターの事業計画および予算編成に関する事項
(6)　社会連携センターの自己点検・評価に関する事項
(7)　その他，社会連携センターに関する必要な事項
2　運営会議は，機構会議の求めがあれば，運営会議における協議経過を報告しなければならない。

第７条　コミュニティキャンパスに関する事項は，別に定める。

第８条　運営会議は，構成員の３分の２以上の出席がなければ開催することができない。

第９条　運営会議の議決は，出席者の過半数の賛成を必要とし，可否同数の場合は，議長の決するところによる。
第10条　本規程の改廃は，研究推進機構会議の議を経て，大学評議会の承認を得なければならない。

附　則
第１条　本規程は，平成24年４月１日から施行する。
第２条　本規程の制定に伴い「ボランティア室規程」(平成14年４月１日施行),「佛教大学コミュニティキャンパス室規程」(平成16年４月１日施行）は，廃止する。
第３条　本規程は，平成30年４月１日から改正施行する。なお，コミュニティキャンパス拠点施設北野の廃止に伴い,「コミュニティキャンパス北野拠点施設規程」(平成25年４月１日施行）および「コミュニティキャンパス北野拠点施設利用細則」(平成25年４月１日施行）は，廃止する。
第４条　本規程は，平成30年７月１日から改正施行する。なお，コミュニティキャンパス拠点施設美山の廃止に伴い,「コミュニティキャンパス美山拠点施設規程」(平成25年４月１日施行）および「コミュニティキャンパス美山拠点施設利用細則」(平成25年４月１日施行）は，廃止する。

③社会連携センター組織

＜ 2022 年度　社会連携センター構成員＞

社会連携センター　大　藪　俊　志（センター長、社会学部准教授）
内　田　　仁（研究推進部　部長）

社会連携課　山　下　仁　男（課長）
海老原　星　太（課員）
宮　本　泰　子（課員）
派遣職員１名

＜ 2022 年度　社会連携センター運営会議構成委員＞

大　藪　俊　志（センター長、社会学部准教授）
市　川　定　敬（仏教学部　准教授）
持　留　浩　二（文学部　教授）
網　島　　聖（歴史学部　准教授）
堀　家　由妃代（教育学部　准教授）
水　上　象　吾（社会学部　准教授）
新　井　康　友（社会福祉学部　准教授）
白　井　はる奈（保健医療技術学部　准教授）
山　下　仁　男（社会連携課　課長）

＜ 2022 年度　社会連携センター運営会議＞

第１回　2022 年　4 月 20 日（水）16：35 ～ 17：20　於：第 4 会議室
第２回　2022 年　5 月 25 日（水）メール会議
第３回　2022 年　6 月　8 日（水）メール会議
第４回　2022 年　7 月　6 日（水）メール会議
第５回　2022 年　9 月　8 日（木）メール会議
第６回　2022 年 10 月 12 日（水）16：30 ～ 17：30　於：第 4 会議室
第７回　2022 年 11 月　2 日（水）16：30 ～ 17：30　於：第 4 会議室
第８回　2022 年 11 月 30 日（水）メール会議
第９回　2023 年　1 月 18 日（水）メール会議
第 10 回　2023 年　2 月 15 日（水）メール会議
第 11 回　2023 年　3 月　1 日（水）10：30 ～ 10：45　於：第 4 会議室

10. 編集後記

この度、『佛教大学社会連携センター年報』第９号を刊行いたしました。
本年報では、2022年度に実施いたしました社会連携センターの事業・活動内容について取りまとめています。

2020年当初から全世界をパンデミックに陥れた「新型コロナウイルス感染症」は、2022年度においては終息することはなく、罹患者の増減を繰り返しながら終わりの見えない状況となっていました。
2022年度のセンター事業については、すぐにコロナ禍以前の状況には回復せず、また今回の本年報にも「特集」しましたように、春先にはロシアがウクライナに軍事侵攻するという武力行使による戦争が勃発しました。本学ではこれを受けて「佛教大学ウクライナ人道支援企画」を急遽開催し、学生、教職員とともにウクライナ人道支援の募金活動およびバザーを開催して、集まった売上金をウクライナへの人道支援金として日本赤十字社に寄付いたしました。秋学期以降は、学内でも対面授業が復活し、それにあわせて多くの学生が大学に戻り、センター事業や学生の活動についても少しずつ動きを見せ始めた一年となりました。

今回刊行いたしました『佛教大学社会連携センター年報』第９号では、このような厳しい活動条件のなかでも多くの事業・活動を行ない、その活動成果についてまとめています。
社会連携センターが行なう「モデルフォレスト活動」、「京都市くらし安全推進課および京都府北警察署との防犯啓発活動」等を代表とする連携事業への取組み、「鷹峯地域活性化プロジェクト」、「SDGs推進プロジェクト」、支援教員による学生主体となった「学生消防防災サークル『佛教大学FAST』」の活動、「防犯啓発・立ち直り支援プロジェクト」などのセンタープロジェクト、また「地域福祉フィールドワーク」や「学生ボランティア室の活動」など、多くの事業を学生、教職員が一丸となって進めてまいりました。
本年報を手にしていただきました皆さまには、ぜひ、「社会連携センター」の事業・活動についてご一読いただき、これらの取組みに対して忌憚のないご意見、ご指導などを頂戴できればと思います。

最後になりましたが、ご多忙中のなか、本センター事業の推進ならびに年報の原稿執筆等に関して、多大なるご尽力をいただきました関係各位の皆さまに心より感謝と御礼を申し上げます。

2023年６月

研究推進部長（2022年度）
内田　仁

佛教大学社会連携センター年報　第９号

2023年６月30日発行

編集・発行　佛教大学社会連携センター

〒603－8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL：075－493－9002（直）　FAX：075－493－9088
https://www.bukkyo-u.ac.jp/
E-mail：liaison@bukkyo-u.ac.jp

佛教大学